
とある科学の螺子発射《ボルトシューター》

或神 枕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある科学の螺子ホルトシューター発射

【Nコード】

N5960L

【作者名】

或神 枕

【あらすじ】

東京西部を切り拓き作られた学園都市。ここでは日々「超能力」の開発が行われている。新縫 真希まゆみ まきは家を追い出されたという理由でこの学園都市を訪れる。通常のカリキュラムと異なる方法、インストリアル能力生成で能力を手に入れた新縫は、外内 出入やうりゅう だいにと共に経験した“ある事件”をきっかけに学校の裏側をかいま見ることになる。

学園都市って東京の中にあるんだから、これも一応上京だよな？

学園都市 東京西部を切り拓き作られた都市。ここでは日々「超能力」の開発が行われている。

その開発の対象は、都市の人口の八割を占める学生たちなのであった……。

「えっと、このあたりな筈んだけどな……」

両手に大きな地図を持ち、背中にはさらに一回り大きいリュックサックを背負いながら一体どれほどの距離を歩いたものやら。

何とか学校まではたどりつけたものの、その次には学校内で迷ってしまうとは俺は自分の想像以上の方向音痴のようだった。

15歳になり、中学も卒業した俺はこの学園都市で新たな生活を始めることとなる。しかし、あまりいい気分ではない。ここに来たのも仕方なしであり俺の本望ではないのだ。ここに来る大半の学生は「超能力」と言う未知の存在にあこがれてやってくるらしいが、正直俺には興味が無かった。普通の高校に行き、普通の大学に行き、普通に就職する。それが出来れば良かった。

では、何故ここに来たのか、と聞きたくなるだろう。即答しよう。

「貧乏なんだよなあ……。ウチ」

数ヶ月前

「お前、寮で暮らせよ」

「え？ どこで？」

俺は何も塗られていない味気ないどころが味の無いトーストを食べながら、ぼんやりと見ていたテレビから視線を逸らし父親の方へと移す。

「学園都市」

その時、まあ今でもそうだが、俺は「超能力」と言う存在ぐらいは知っていたが、それがどんなものなのか具体的には把握していなかった。

理由は当然「興味が無かった」からだ。故に、もちろん学園都市にも興味は無い。

丁度テレビの方からは、学園都市についてのニュースが流れていた。何でも銀行強盗が起きたそう。学園都市でもやっぱり犯罪っていうのはあるんだな。

「……まあ、寮生活というのは百歩譲っていいにしても何で学園都市なんだよ？ 俺別にそんなのに興味無いぞ」

「向こうの寮にはな、一人部屋で、朝昼晩の飯つき、その上ゼロ円で入学できる学園があるんだよ。そこに行け」

俺は口の中にあるパンを少しだけ吹き出した。その後、数回咳き込んでから呼吸を整える。

「ぜ、ゼロ円!? 何だよそれ、明らかに怪しいと言つか何とい…」

「ぐぐだぐだ言うな。もう入試の手続き済ましちまったよ」

はい? それはあまりにも子供のことを考えてないのではないか!?

そういえば俺の誕生日とか趣味とか最近やたらと聞いてきて、ようやく子供の大切さが分かって急に積極的に話しかけてきたのか。などと安易な考えをしていたが、違う。断じて違った。俺の親は子供のことなんてかえりみず、それどころかさつさとどこかに行ってしまうなどと考えていやがった。

なんて鬼のような親だ! これが果たして親のすることなのか!?

と思っただが、まあ一概に親が悪い訳でもないだろう。世の中にはきつといろいろあるのだ。

そのいろいろを体験するには、こつやって親元を離れてすごすのも悪くはないかなと感じ始めている。

「それよりどこなんだよ俺の寮っていうのは。ん、地図には詳しく載ってないし」

やれやれ、もう既に三回も職員室に行つて道を尋ねてるし出来ればもう行きたくはなかったんだが、こうなったら四度目の正直、もう一回先生に道を聞くしかないか。
ああ、でもさつき聞きにいったときに、

「分かりました！もう絶対大丈夫です！ありがとうございます」
なんて言つちまつたし、これ以上聞きにいったら目つけられそうで嫌なんだよな。と言つてももうとつくに先生達に知れ渡つてるだろうな……。今年の新生に凄まじい方向音痴がいるつて。

「っと、ここじゃないか？」

木製のドアに「187」と書かれているプレートが掛けている。ポケットに入れているカードキーを見ると、同じく「187」とかかかっている。

どうやら神様が味方してくださつたようだ。これ以上歩き続けるのは、流石さすがに勘弁願いたいところだった。

てつきりこんな近未来的な作りをした校内だから、木材なんて見ることはないんだろうなと思つていたが、そうでもないらしい。

あちらこちらで木材の机や椅子を見かけた。どうやら「木」という素材はいつの時代、どんな場所でも扱いやすい材料のようだ。

「はあく。やつと見つけたよ。歩きつぱなしで疲れたし今日はもう寝るかな…ふあく」

欠伸をしながら横にある端末にポケットから出したカードを近づける。ピピッと言う電子音の後

「カクニンシマシタ ドウゾ」

という合成音声が流れた。

「！ 何だ機械音声か……びっくりするなあ、おい」

俺の故郷では家庭にカードキーがあると言うのだけでも珍しいのに、声まで流れるとは流石学園都市。段違いのテクノロジーだ。でも、この程度で驚いてちや田舎者丸出しだよなあ……。それが悪いとは思わないにしろ少し恥ずかしいというか、目立ちそうで嫌だ。

「なんだかんだ言ってもやっぱ凄いやな、学園都市って」

「そうかな？ 僕は普通だと思っただけど」

「！ 何だ機械音せ……。 って、ええ！？」

いやいや機械音声では無い。今は明らかにきれいな抑揚で話していたし、会話が成立していた。

まさかここまで高度な技術を手にしていたのか？ 学園都市というのは！？

などと一瞬思ったが違っようだ。答えはとても簡単。

「僕は機械なんかじゃないよ。君のルームメイト。外内そとうち 出入でいり。よろしく」

「る、ルームメイト？ そとうち、……何？」

ベッドに横たわる少年は、外見は俺と同一年の15、6歳ぐらいに見える。なぜか髪の色は白っぽい灰色をしていて少し不気味だ。

恐らく寝巻きなのだろうが、半袖とも長袖ともいえない中途半端な長さの白い無地のTシャツに、灰色のダボダボの長いズボンを履いている。

眠たいせいだろうか、目が虚ろで焦点が合っていないように思える。俺を見ているのではなく、まるで俺の向こうにある壁を眺めているようだ。

「出入だよ。外側と内側の「外」と「内」で外内。出入口の「出入」で出入だよ」

外内と名乗るその少年は、淡々とまるで俺の向こうの壁にある文字を読むかのように答えた。

「いやそうじゃなくて、何でルームメイトなんかいるんだよ！ — 人部屋のはずじゃないのか？」

確かに父さんはそう言ったはずだ。まさか嘘？ 子供に対してあんな堂々と嘘をついたというのか！？

そう考えると無性に腹立たしくなり、俺はつい壁に右手を叩きつけてしまった。かなり思い切り殴ったせいか、すこし手が痛む。

「一人部屋が許されるのは来年か再来年になってからだよ。しかも単に上級生になるだけでなく、ある程度以上の能力値レベルは必要になるけどね」

「そ、そうだったのか？」

殴った手をさすりながら、俺は数秒前の自分を恨むと同時に、騙した訳ではないにしろ、きちんと内容を伝えてなかった糞親父を恨んだ。

まあ自分できつちり確認しなかった俺も悪いのかも知れないが、そんなことはこの際棚に上げてやろう。

「君が寝るのは自由だよ。そっちのベッドで寝といて。ああ、でも風呂には入ってきてくれないかな？　僕の鼻が悲鳴を上げている」

「会って早々失礼な奴だな、お前……。分かったよ。シャワー浴びてくる」

「風呂に入ってくれといったんだが」

「分かったよ、風呂に入ってくるよ！」

疲れている時にイライラを抑えようとすると、余計にイライラしてくる。なんと効率の良いストレス蓄積か。

「いつてらっしやい」

チラツと外内のほうを見ると、本を読みながら両足をバタバタと叩きつけていた。

まさか入って一分でまた出るようになるとは思わなかった。

つたく、何なんだあの失礼な奴は。初対面の人間に向かって単に「臭い」ならまだしも、「鼻が悲鳴を上げる」って言うのは少し毒舌過ぎるだろ。

「あれ？　浴場ってどこだっけ？　そうだ、地図地図……」

と地図を探すが、ああそうだ。地図は部屋の中にあるんだ。部屋に戻らなきゃな。　と思っただら中に入るにはカードキーがいるんだ

な。カードキーカードキー。
……あれ？ カードキーもない。 というか何も持っていないぞ俺。
そのうえ部屋はオートロック。キーなしで入るには中から開けても
らうしかない。

「おい、外内。鍵開けてくれないか？ 地図を取りたいんだが」

「風呂に入ったのかい？」

つな、こいつは。面倒な奴だということは既に分かっていたがこ
まで徹底しているとは。
それとも、俺もしかしてそんなに臭うのか？ そんなに悪臭を放っ
ているというのか？

もう我慢の限界に達しようとしていたが、ぐつと堪える。この程度
で怒っているのは今後の生活がやっていけないだろう。
とにかく今は、相手がどんな奴にしる出来るだけ仲良くしていき
たい、と考えたので出来るだけ努めて冷静かつ明朗に

「だから風呂に入るために地図がいるんだよ」

と言った。 というか、言っただつもりだ。

「断る。ドア一枚を通してでも既に僕の鼻が持たんのにこれ以上近
寄られてしまえば、僕の鼻が奇妙な形に変形してしまいそうだ」

「……………」

もう一度頼もうと思ったが、止めた。 どうせこれ以上話しても埒が
あかないだろう。

正直、こいつの暴言や罵倒の語彙力には感心すると同時に呆れる。
俺の親もひどい奴だと思っただが、
こいつと比べればまだ可愛いものだったのかもしれない。

「分かった分かった。もういい。自分で探すよ」

俺は自分と外内の部屋を後にして、地図も無しにまたこの迷路に挑むことになった。

そういえば俺、方向音痴なんだっただな。浴場にたどりつき、ここに戻ってくるのは至難の業だろう。

「大丈夫かあ？ 俺」

学園都市って東京の中にあるんだから、これも一応上京だよな？（後書き）

小説を書くのは初めてですが、細々と続けていければ幸いと思っております。

内容は基本的に「とある科学の超電磁砲」「とある魔術の禁書目録」の設定を使わせてもらっています。

原作と食い違った内容や誤字、脱字もあるかとは思いますがどうかよろしく願います。

学園都市にもテンピラっているんだな……

「君、レポートは出来てるの？」

「へ？」

現時刻は午前8時。天候は晴れ。清しい洗濯日和ともいえよう。だからこそ俺は、昨日着ていた衣類やベッドのシーツを今から干そうとしているわけなのだ。

その横で朝食としてするめいかを食べている外内は、やはりまだ眠いのか

昨日と同じ焦点の定まっていない目で俺のことを見ている。しかしその目はやはり昨日と同じく虚ろであり、それどころか昨日以上にぼーっとしているようにも見える。

「レポートだよレポート。今日の課題だよ？」

「レポート……。いや、覚えが無いんだが」

さっぱり記憶に無い。そもそも今の今まで「課題」と言う存在を知らなかった俺からすれば、まずその課題という言葉の意味を聞いたところだったが、聞いたところで馬鹿にされるのか落ちだろう。

「はあ……。君、方向音痴だけじゃなくて単に脳全体に問題があるだけなんじゃないのかい？だとしたら昨日はあんなひどいことを言うて失礼した。今後はそれを踏まえたうえで罵る事にするよ」

前言撤回。聞かなくても馬鹿にされた。それもかなり酷いことをい

われたような気がするのだが、今はそんなことを言っている場合ではない。

「ほら、先週入学を済ませたとき先生がいったじゃないか。『来週の月曜日に超能力に関するレポートを各自書いてくること』ってさ。ホントに記憶に無いのかい？」

どうやら俺の記憶を司る海馬がいかれてしまっているらしい。まるで記憶に無い。

どうにも外内も言葉を信じる事が出来ない俺は、軽くリュックサックの中をあさってみることにした。軽くあさったにも関わらず、わずか5秒で原稿用紙を発見することが出来た。と言うか、出来てしまった。

「……。なあ外内。これってもしかして、そのレポートを書くための紙かな？」

「もしかしなくても、どう考えてもそうだと僕は思うけど」

「……。なあ外内。その課題を出した先生って怖いか？」

「いや、優しい女性の先生だったと思うけど」

「なら大丈夫だろ！」

俺は、前向きで明るくポジティブな人間なのだ。過去を振り返ることとはしないのだ。手にした原稿用紙をリュックの奥へと戻し、洗濯物を干す作業に戻る。

「別に文句を言つつもりは無いけど、責任は自分で取つてよね」

そう言うと外内はベッドの下から黒い手提げ鞆を取り出し、するめ
いかをくわえながらドアを開け外に出て行ってしまった。

「ああ、そう言えば」

と、ドアがしまるギリギリのところまで外内が言った。

「君、名前何？」

「ん？ 名前？ ああそうか。とっくに言ってると思ってたけどそ
ういえば言つてなかったっけ。悪い悪い」

「本当に君は忘れっぽいね」

ドアの向こうにいるので顔は分からないが、恐らく無表情で言つて
いるのだろう。

「うるせー。俺は新縫^{あらぬい} 真希^{まき}つて名前だ。

新緑の「新」に裁縫の「縫」、真実の「真」に希望の「希」だ」

俺はいつも名乗るように名乗り、そしていつも説明するように漢字
の説明を付けたした。

「新縫真希か。君、男だよな？」

「そつだよ男だ。仕方ねえだろ、こついう名前なんだからさ」

このセリフもまたいつものことだ。

男のくせに「まき」なんて名前は確かに違和感があるが、慣れてしまえばどうということはない。

ただ自己紹介のときに少し目立つ程度だ。

「分かったよ新縫君。それじゃ、また後で」

「ああ。じゃあまた後で」

少し開いていたドアが完全に閉まりきり、ガチャンという音を境に部屋の中がしん…、とやけに静かになった。

「ん〜、さてと。俺もそろそろ行きますか」

俺は軽く伸びをして固まった背中をほぐす。

さっきあさったりリュックの中から今日の予定表を取り出し、そこにかかっている物を用意する。

「やっぱり提出物の欄に“レポート”って書いてるなあ……」

さっきの気だるさが蘇ろうとしたが、それを何とか抑え必要なものを取り出していく。

用意を済ませた後、最後にカードキーを取り出しあの大きなリュックとは別の小さめの紺色の鞆を肩から掛け、部屋を後にする。

ふと携帯で時間を確認すると、時間はさっきから20分経過した8時20分。

十分に間に合う時間である。少なくとも中学生時代の時には。

「あれ？　そういえば俺のクラスってどこだっけ？」

昨日に引き続き、俺はまた迷路と第2ラウンドを繰り返すことになった

・
・
・

小走りになりながら時計を確認する。

8時50分

大丈夫、授業はもう始まっているかもしれないがまだ許される範囲内のはずだ。

寮の中で散々迷った拳句あげく、何とか脱出に成功した俺は寮と学校を繋ぐ一本道を猛ダッシュで駆け抜けていた。

「何とかあの迷路は抜け出せたけど、校内もまだ完全には道を把握してないから……」

寮ほど複雑な造りをしてはいなくても学校に入って真っ直ぐに教室へ！ というのは無理であろう。

何せ俺は、正真正銘の方向音痴なのだから。

そろそろ走り続けるのが限界になりそうになった時、ようやく我が学校が見えてきた。

おかげも一踏ん張りする気になった。かなり息切れをしていますが、せめて休むのは校門をくぐった後にしたい。

校門に着くまでに約1分、校内でも一通り迷うとして10分弱。9時に付ければ御の字ってところか。

そんな小学生でも出来そうな単純計算をしていたせいで、集中力に欠けていたようだ。

俺は誤って何かを踏ん付けてしまった。犬のフンでも踏んだと思い、運がないと思いつつも走り去ろうとしたとき、

「おい、そのガキ。人様の足を踏んでおいて何も言わずに立ち去るなんてのは

ちよつとマナー違反じゃねえか？」

という声が後ろの方から聞こえた。

若干以上に不吉な予感をしながら振り返ってみると、いかにも喧嘩が強そうというか争いごとが好きそうというか、とにかく出来れば関わりたくないような雰囲気を持つ男が3人こちらの方を睨みながら嫌な薄ら笑いを浮かべていた。

「こんな時間に街をうろろしてちゃ駄目だろ？ 遅刻しちまうぜ、お前。

まあ俺にぶつかった時点で、今日は遅刻じゃなくて欠席になるだろっかなあ！！」

そんな、もうどうしようもないほど手垢がついたセリフを吐きながら足を踏まれた男と愉快的な仲間達はこちらに走って近づいてきた。

いや俺は足を踏んだだけでぶつかってはいません、などという訂正の言葉にはまるで意味がなさそうだったので、俺は振り向いた顔を瞬時に前へと向き直し、これまで以上の猛ダッシュを試みた。

「くそっ！ 何で俺がこんなことにならなきゃなんねーんだよ！」
だが、これまで走り続けていた足にこれ以上の負担をかける訳にはいかない。

だからといってあのチンピラ？達につかまるのも絶対に御免だった。

「こういう時に超能力でもあれば……って、そうだ！」

こんなことを忘れているとは本当に俺の頭はもう駄目なのかもしれない。

俺もまだ学校に一度しか行っていないとはいえ、既にここ学園都市の一学生。

弱くても「超能力」を所持している身なのだ。

つつつても、まだほとんど使い慣れていないこの能力。果たして役に立つのか？

それに、街で無闇にこんな戦いをするのは気が引ける。

少しの間考えたが、答えは一つ。

俺は素早く動かしていた両足を止め、その場にとどまる。

「けっ、ようやく諦めたか。観念しやがれええ！」

とチンピラの一人は上着からナイフを取り出し、間合いを狭めに近づいてきた。

そのナイフを見て俺は少しだけ安心する。

何故なら、そのナイフは刃の部分が鉄だったからだ。

「な……に……?」

俺に向かってきたナイフは目標にギリギリ届かず、空中で静止している。というか俺が静止させた訳なのだが。

「くそっ！ 何で動かねえんだよ、これ!!」

ナイフでの攻撃を諦めたチンピラは握っていた武器を放し、後ろに下がった

しかし、持ち主が居なくなるうとも、まるでナイフはそれに気づかないようにその場に張り付いている。

そう、まさにそのナイフは、そこに張り付いているのだ。

「一応俺も、超能力者っていうのか？ まあそんな感じのやつなんだが

俺の能力は発電能力エレクトロマスタつつらしい。

何でも、電気を生み出せるんだとよ。凄いよなあ。まあ、俺は直接電気を発生させら

れる訳じゃないんだけどよ……。」

そこまで言うと俺は、いったん能力を停止させる。

すると、それまで重力に逆らうがごとくそこに留まっていたナイフ

はごく普通に落下する。

「自分の周りに磁場を発生させることが出来るんだよ、俺は。だからそのナイフは、刃の部分が俺の生み出した磁力に引っかかって動かなかつたのさ」

「く……。この野郎！ だったら素手でやりやあいい話だろう？ 説明ご苦労さんよ、この磁石男があ！」

次は比較的大柄な男が、右腕を勢いよく振り上げながら襲ってくる。素手で殴りかかるとは、本当に喧嘩が強いお方だったのか……。少し予想外。さっきので逃げてくれると思ったんだがなあ。

「お前、人の話聞いてたか？」

「は？」

俺は再び発電能力により磁場を目の前に発生させる。すると、さっきのチンピラが落としたナイフの刃が磁力に反応して上を向き、そのまま一気に上昇した。

シュツという空を切る音と共に、完全に持ち主が変わってしまったそのナイフは殴りかかってきた目標の指を切りつける。わずかながら、指の先から血が出ているのが見えた。その後、空中でフワフワとゆれながら第2の攻撃を仕掛けようとしているかのように、刃をチンピラの顔面の方に向けた。

「次は目玉に刺してやろうか？」

俺は相手を威嚇するように見ながら、脅しをかけてみる。

無論本気で切るうとしてしている訳ではないが、雰囲気はどうにかしなければ本格的に相手を傷つけることになる。

そこまでするつもりは無い。そこまで俺は、短気ではない。

「つく……。仕方ねえなこれじゃ……。さつさと逃げるぞお前ら
！！」

恐れをなしたのかどうかは分からないが、チンピラ3人はさつさと俺から離れていった。

「ふう……。どうにかなったなあ、今回は。正直あそこまで上手く扱えるとは自分でも思ってたんだが」

こういうのも「才能」というのだろうか？ だとしたら、

俺はあまり欲しくない才能だった。

人をこつとも簡単に傷つけられる才能など出来れば持ちたくは無いです。

「あつ、時間！ 今何時だ！？」

携帯電話を取り出し、液晶画面に目を落とす。

9時20分

.....つっ
っ！！

授業終了まであと25分。

間に合うかどうかは分からない。

学園都市の先生ってみんなこんな感じなのか？

階段を駆け上がり、廊下に着いたところで左右を確認し俺は手元にある地図を再び確認する。地図によればこの廊下を右に進み、突き当たりのところに自分の教室 つまり1-Dの教室があるらしい。この地図は先ほど通りかかった先生に無理を言っ書いてもらった代物だ。

この俺が見て一発で目的地に到達できる地図をかくとは、あの初老の教師中々の腕である。何の腕なのかは分からないが。

地図どおりに進んで行くと、確かに1-Dの教室があった。

安心すると同時に、教室に入った後の視線が怖い。入学直後の授業にここまで遅れるというのは、明らかに不良か何かのすることだ。まさにその「不良」のようなモノのせいで自分が今この立場にいると思うと、腹立たしいというか複雑な気持ちになった。

「ぐだぐだ考えても仕方ないか。……ふう、よし！」

俺は軽く深呼吸をし、ゆっくりと教室のドアを開ける。

「すみません、遅れました！」

ドアを勢いよく開けながら、謝罪の言葉を発した。当然、先生に対して言った発言なので反射的に先生の姿を探す。

「やあ、新入生。とりあえず静かに席に座れ」

落ち着いた女性の声が聞こえたのでそちらを見ると、ここの担任であ

ろう人物が足を組みながら生徒のよりも少し豪華な大きめの椅子に座っていた。

外内の話では「優しい女性の先生」と言うことだった。

この言葉の中で正しい言葉は「女性」ぐらいに思える。いや、正確には「先生」という言葉も正しいのだが、どうしてもそう思うことが出来なかった。

上半身には黒いキャミソールにブラウスを着ていおり、よく女性社員などがはいているようなタイトスカートを身に着けている。ここまでは一応先生らしい見た目である。しかし、髪は金髪でポニーテール、そして寝癖がひどいという一体いくつの属性を足したら気が済むんだと言うような髪型で、さらにブラウスのボタンは無造作に留めてあり、胸部がチラチラしていて逆に鬱陶しい。一応眼鏡をしているものの、その目からは「やる気」という言葉が欠如している様に見える。

つまり、こいつは絶対に子供が好きだからとか物事を教えるのが好きだからとかいう理由で教師になったわけではなく、単に適当に生きてたら、成り行きでこの職に就いていた。そんな感じがする。完全に独断と偏見だが、第一印象がほぼ全ての印象となる世の中。最初の授業でその姿は流石にまずいだろう……。と、既に数十分前に俺以外のこのクラスの生徒は皆思ったのであろう。そして今、残りの俺も同じ感想を抱くのであった。

先生の容姿の説明をし続けるわけにもいかないの、俺は教室の入り口から歩き出し自分の席を探してみる。教室内に特別変わった点は見当たらず、俺が今までに見たことのあるような普通の教室だ。机の数はおよそ30台ほどで、前には黒板と教卓がある。黒板には大きく縦書きで「片霧 遊井」と書かれている。読み方は「かたぎ

り ゆい” だろうか、先生が自己紹介のときにでも書いたのであるう。

そしてその横には、レポートの発表とも書かれていた。

当然それは外内が言っていた。そして俺がやってくるのを忘れたレポートのことであろう。

遅刻した上に課題も忘れてくるとは、一体お前は何とためにこの学校に入学したんだ、と言われそうだが仕方ない。忘れたものはどうしようもないのだ。過去を振り返らず、前向きに、ポジティブに生きよう。

「あの、先生。レポートの課題…… 忘れました」

「先生、俺も忘れました」

後ろから声があったので振り向くと、何と云うか全体的に暗そうなおーラを放っている生徒が立っていた。その声は機械的で、まるでこのセリフは既に何度も言ったことがあるというようなそんな感じのする声だった。良くも悪くも制服がよく似合う。ファッションに興味など無く、着れば何でもいい。そういう考え方をしていそうだとか面倒臭そうとかではなく、そんなことを考えることすら面倒だと言わんばかりの表情をしている。

外内みたいに何考えてるか分からん奴だな…… と思った。あいつはまだよく喋るからいいが、こっちはあんまり会話とかが好きそうで

は無さそうだ。休憩中は一人で静かに本を読んだり、携帯をいじったりするのが主といった感じか。

まあ外見とかはともかく、一応自分以外にも初日から大きなミスを犯す人間がいることを知り少し安心した。

「そうか二人とも忘れか。分かった座っておけ」

怒られなかったのはいいが、結構ぶつきらばうな言い方だなと思った。しかし文句は言えまい。当然俺（達）が悪いのだから。

「ただし……」

先ほどで終わりかと思った先生の言葉がさらに続いた。同時に、俺も少し気構えてしまう。俺と同じくレポートを忘れた生徒の方を窺ってみたが、さっきと同じ気だるそうな表情のまま立っていた。

「二人とも今日は放課後教室に残れ。補修よ」

補修、か。妥当と言えば妥当であろう。高校生にもなって課題を忘れ、はいそうですか次からは気をつけるように、だけで終わらせてくれるとは最初から思っハナてはいなかったし。

「分かりました。ええ…かたぎり先生でいいんですか？」

「そう、かたぎり。片霧かたぎり 遊井ゆい。専攻は心理学と量子学よ。よろしく」

と、俺の顔を見ずに名簿を見ながら挨拶する片霧先生。俺の相手に対する印象も良くないが、相手からの俺に対する印象も芳かんばしくは無

いよいよだ。そりゃ、初日からこのざまなんだから当然だけど。

俺は席に座り、鞆の中の教科書やら筆記用具を机の中に収めていく。

「それじゃ田司たつかさは忘れだから、次の人発表して」

レポートを忘れたあいつの名前は田司というのか。一応覚えておくう、どうせすぐに忘れてしまっただろうけど。

・
・
・

所詮、入学初日の授業。ほとんどは先生の自己紹介や授業内容の説明などで終わってしまい本格的な授業というのは結局、一時間目にあっただけで片霧先生の授業ぐらいだった。

そして放課後。

生徒は皆帰ってしまっただけで俺だけ……では無く俺と田司だけになった。予想通り田司はあまり他人と関わるのが好きではない様子で、二人だけの空間を静寂が包み続けていた。

………………。何か話しかけたほうがいいのか？

「先生は待つてろって言うたけど、なかなか来ないな」

「そっだね」

「……………」

「……………」

会話終了。

「レポートって、どうやって書いたらいいんだ？俺全然分かんねえんだけど」

「さあ？先生が教えてくれるんじゃない？」

「そ、そうだな。うん、そうだそうだ……………」

「……………」

「……………」

会話終了。

駄目だ、会話が続かん。やっぱり急に話しかけるのって変なのか？俺の地元だったら、知らない奴とかでも全然普通に話したりしたんだけどなあ……………。

「お待たせ二人とも。レポート用の原稿用紙と少しだけ資料を持ってきたぞ」

気まずい空気の中、片霧先生がやって来た。

ずっと思っていたんだがこの人の喋り方って、男っぽかったり女っ

ぼかったりして安定しないような気がする。そういうキャラなのかな？ よく分からんが。

「まあレポートっていつでも、みんな教科書丸写しだったりパソコンで調べてきて丸写しだったりだからそんなに真面目にすることないわよ。テキストテキスト」

授業中以上にふっきれたな……先生。熱血教師っていうのも辛いがこつこつ掴みどころの無いというか、逆熱血教師（熱血の逆だからと言って、冷血と言うわけでもない）とでも言おうか。

とにかくこの先生を相手に話すのは、田司と話すのおなじぐらいに大変そうだった。

そういえば、と思い田司の方を見ると早速レポートを書くための資料をあさっていた。

が、すぐに自分の席へと戻り次は机の中をあさはじめた。

まさか、と思えばしばらく眺めていると予想通り机から、能力史 超能力に関しての歴史や進歩について学ぶ学問 の教科書を取り出した。そしておもむろにページを開くと、教科書の方と原稿用紙の方を交互に見ながら、かなりのハイスピードでペンを動かし始めたのだ。

簡単に言うと、田司は教科書を丸写しし始めた。

確かにみんな丸写ししてたが先生は言ってたが、目の前でそれを実行するとはなかなかの猛者である。

人目を気にしないその行動力は、将来きつと役に立つであろう。

「ほら、新縫も原稿用紙とってさっさと書き始める」

そう言うと片霧先生は机の上にある白紙の原稿用紙を椅子に座ったまま数枚取り、それを自分の持って来た資料の中に挟みだした。そして、

「ほれ」

という言葉と共に、手作りのペーパーサンドイッチを俺に思い切り投げつけてきた。

俺はそれを間一髪で避ける………ことが出来ずに顔面に直撃してしまった。

しかも、きれいに資料の角が俺の額にクリーンヒットした。

「つてえ！！ な、何するんですか先生！ 危ないじゃないですか！」

「ん？ ああすまんすまん。これぐらい軽くキャッチしてくれると思っただがな。」

まあ、今のは完全に100パーセント24時間365日満場一致でお前が悪いな」

「はあ！？ 日本語でお願いしますよ！」

ていつか普通に謝ってくれ。俺が悪い要素が見当たらない。

「さっさと書き始める。私も忙しいんだ、長時間お前に付き合ってる暇は無い」

「わ、分かりましたよ………」

何故俺はここまで一方的に怒られているのか。

それについてレポートを書いた方がよほどいい内容を書けそうなものだが、勿論そんな事をしている場合ではないので、イライラしながらもレポートを書いていくこととした。

その時、片霧先生の口からありがたい言葉を頂いた。

「新縫、その資料の19ページあたりにいいのがある。それ写せ」

こんなことを言ってくれる先生はそうはいない。教師としては悪い例だが、困っている人はどんな手を使っても助けるという意味ではゲームやアニメの主人公としては、まったくもっていい例だと思った。

「先生、書けました」

俺が書き始めようと思ったその瞬間に、田司が静かに言い放った。

なるほど、俺が先生と下らない茶番を繰り広げている間にレポート一つが書けてしまうのか。そう考えると、何だがとても時間を無駄にしてしまったような気がしなくもない。

何だよ、完全に100パーセント24時間365日満場一致って。

いや意味は分かるけど！ 何と無く雰囲気で分かりはするけれども！ その言葉を正当化するというのには、今一度異議を唱えたいものである。

「早いな田司。お前大好きだ。帰っていいぞ」

「はい、失礼します」

お前らは日本語訳した英語で話してるのか、と突っ込みたくなるほど必要最小限かつ淡泊な会話をすませると、田司は既に帰る用意を済ましていたらしく、そのままドアから出て行ってしまった。

「さて、残るは新縫、お前だけだ。二秒で仕上げる」

「出来ませんよ」

「やれやれ……。お前は田司と違って出来の悪い子のようにだな」

「なっ、それは流石に言い過ぎでしょ！」

「そつだな、いくら田司でも二秒は無理だろう」

「そつちじゃなくてっ!!」

「早く書け」

本当に調子が狂うの一言に尽きる。

どうしてこう俺の周りの人間は、人を馬鹿にしたり罵ったり煽ったりするのが上手いんだよ……。

「はあ……。大丈夫じゃなさそうだよなあ。俺……」

今日のはじめに言っていた、前向きに、ポジティブに生きると言う言葉が嘘のように俺はネガティブ思考になりつつあった。

学園都市の風紀委員ってすごいんだな

結局、田司が帰ってから約30分後に俺は教室を出ることが出来た。レポートはすぐに書き終えたのだが、その後に片霧先生の意味不明な愚痴を聞くことになり、少々時間をくってしまったのだ。

その愚痴の例を挙げると、「3×8」と「4×6」の答えが等しいのが納得できない」とか、「じゃんけんは掛け声を出している方が、圧倒的にイニシアチブを握っていて不公平だ」などである。

他にも何か言っていたかも知れないが、覚えておいて得するような話はゼロだったはずなので記憶に無くても安心である。

というわけで下校中の俺は少し寄り道をしていた。金はあまり無いが、金銭面は学園都市の方から多少ではあるものの負担してくれるようなので買い食いぐらいなら全然問題ないのである。

「コンビニで買い物するなんて久々だなあ。定価で物を買うという行動は我が家では厳禁だったし、その考えには俺も同意だったしな」
チョコレートやアイスクリーム、ポテトチップスなどもう最近の子供からは定番過ぎて人気の無いお菓子でも俺からすればまだまだ現役、大活躍なのだ。どの味を買うかで軽く小一時間は悩めそうだが今日はそんなことに時間を費やす気は無いので、一番無難そうなのうす塩味のポテトチップスを買うことにした。

レジで購入し歩きながらポテチンをほおばる。想像していたほど美味しくはなかったが、俺にとっては新鮮なパリパリとした食感と少し濃い塩味がなかなか癖になる。あつという間にたいらげてしまった。

「ん〜。何故だろう。あんまり美味しくは無いのにすぐ食べ尽くし

てしまう……。お菓子というのは恐ろしいな」

と最近の子供にしては珍しい健康に配慮した発言をする新縫であった。

次は横にあった「コンソメパンチ」という中々いかつそうな名前のやつを買ってみるかな、などと呑気なことを考えていると目の前に見覚えのある人物の後姿が見えた。

そいつは制服がよく似合っていて、全体的に暗い雰囲気俺と同じ課題のレポートを忘れたやつ。

つまり田司だった。

どうして自分よりも先に帰ったはずの田司がこんな場所にいるのかは分からないが、一応ここで会ったのも何かの縁だろうと思いをかける事にした。

当然、会話が續くなんて淡い希望は持ち合わせていなかったが。

「おい田司。こんなトコでな」

田司は近づこうとした俺を右腕を上げて制した。

それは単純に止まれという意味なのか、それとも俺に対する嫌悪感からくるものなのかは分からないが、とりあえず止まることにした。

「……………田司？ どうしたんだ？」

俺の質問に対しイエスともノーとも言わずに、田司は俺を制した右腕を前に突き出し“何か”を指差した。

その示した方を見ると、何とそこには……………！

水鉄砲を持った少女がジッとこちらを見つめていた。

背はあまり高くは無く髪も黒いショートヘア。どこの学校の制服かは分からないがおそらくまだ中学生ぐらいであろう。

しかしその目は力強く、しかし何故か少し泣いているようにも見えた。

「……………」

まてまて、落ち着け俺。どうしてこんなにシリアスな場面で水鉄砲少女が登場するんだ。

もしや田司は大のロリコンで、その可憐な見た目に思わず度肝を抜いてしまい動けなくなってしまった、という訳では決して無さそうなので俺はさらに首を捻る。

「なあ田司。あの子がどうし

「逃げる」

会話成立、ばんざーい。

もとい「逃げる」とは一体どういう意味なのか、そして何から「逃げる」のだろうか。

普通に考えれば「あの少女」から逃げろという事だろう。しかし普通に考えて「あの少女」から逃げる理由は無い。

そんな矛盾した考えをもった俺は、問題を解決すべくもう一度田司に質問を試みた。

「逃げろって……どういことなんだ？」

その質問に答えは返ってこなかった。しかし、答えは理解した。

なぜなら、少女が水鉄砲から放った水が俺に当たったからだ。

別に自分の服が濡れたことに対して怒っているという訳ではない。むしろ大喜びしてもいいぐらいだ。今日はまだ4月だというのに蒸し暑く、多少濡れたところでなんの問題も無いのだから。

けど、違う。全然違う。理由はそんなじゃない。

確かに俺は濡れた。腕に水がかかってその部分だけ色が変わり、次第に変色している。問題なのはその変色していく色が、

明らかに赤い

ということだった。

それはつまり、彼女の放った「水」という弾丸が俺の腕の肉を傷つけたという意味である。

「……………?!」

反射的に俺は傷ついた左腕をかばうように押さえつけた。

どうなってるどうなってるどうなってる!! どうして水がかすっ

た程度で俺の腕から血が出るんだよ！

混乱しそうになる頭を必死に落ち着かせようとする。それでも、腕から伝わってくるズキズキとした痛みは変わらず血も止まる気配は無い。

「新縫、だっけ。早く逃げたほうがいい。あいつは風紀委員^{ジャッジメント}。どうやら俺を捕まえる気らしい」

「捕まえるって……。どういことだよそれ。お前なんか悪いことでもしたのかよ!？」

風紀委員^{ジャッジメント}と言う存在は学校で聞いた覚えがある。小規模な警察のよ
うなもので、その全てが能力者の学生で構成されている、
という組織だ。しかし、校内での事件を管轄するはずの風紀委員^{ジャッジメント}が
何で校外で、しかも田司を捕まえようとしているんだ？

「悪いことなんてした覚え無えよ。むこうから急に襲って来やがったんだ」

「おかしいだろ、それ。風紀委員^{ジャッジメント}は文字通り風紀を守るのが仕事だ
ろ？ どうして自分から攻撃してくるんだよ!」

「それが分かれば苦勞しねえ。とにかく逃げるぞ!」

そう言うと田司は振り返り、俺が先ほどまでいたコンビニのある方
向へと走り出した。何が何だか分からない俺も、これ以上ここに
いるのはまずいと感じたので、田司に続いて逃げる事にした。

「ま、待ちなさい!」

少女が叫ぶと同時に水鉄砲を撃つ。周りから見れば水鉄砲に怯える高校生というのは滑稽こっけいだが、あれに当たれば本物の鉄砲に当たったのと同じぐらいのダメージになる。

水（弾丸）は俺ではなく田司の方へと放たれていた。高速で近づくとそれを避けるのは不可能だろう。

しかし俺にはどうすることも出来ない。磁力を発生させたところで周りには何も無い。大きな鉄柱でもあればそれを盾にすることも出来るかもしれないが、生憎とそんな物は周囲に一切無かったのだ。

「田司あ！」

思わず俺は叫ぶ。

水（弾丸）は田司のすぐ後ろにまで近づいていた。もうどう足掻いても避けることは出来ないだろう。

「チツ、こんなトコで死んでたまるかよ……！」

そう田司が言い放った瞬間、標的に向かって一直線に馳せていた水が消えた。

いや、正確に言えば水が落下したのだ。田司に当たる直前で。

「!?!」

少女の顔は明らかに驚愕しているようだった。

俺も何が起きたのが分からなかった。だが、どうやら田司にはあの水鉄砲はきかないらしい。

そう考えると俺も少しは落ち着いていられた。こちらに相手の攻撃手段を潰せる技があるなら、ある程度はどうにかなるはずだ。

「俺の能力は重塞領域グラビティエリアつつつて、重力を増減させられるんだ」

「ん？ どういうことだ、それ？」

「とにかく今は走れ」

後ろからはまだ少女が追いかけてくる。走りながら水鉄砲を撃ってはいるものの、その全ては標的に当たらず地面にへばりついていく。

「どうして……。どうして当たらないの!？」

どうやら相手も焦りだしたらしい。声は荒々しくなっており、今にもヒステリーを起こしそうだ。

幾つもの水滴が道上に広がっていく。どうやらある程度の距離を保っておけば田司の能力でどうにかなるらしい。

「そろそろ……。かな」

「な、何がだよ？」

田司の謎の言葉に対して俺は質問する。

「というかこいつなかなかタフな体してるなあ。華奢な体格に反してこれだけ走り続けてもまだまだ余裕そうだ。俺も出血のせいで多少は元の体力よりも劣っているとはいええ、かなり丈夫な方だと自負していたんだが……。」

「水鉄砲。そろそろ切れる」

「切れる？ ……そうか！」

そう、水鉄砲だって無限に弾があるわけではない。それには限界がある。つまり田司はその「限界」を待っているのだ。

と言ったそばから、途切れることなく発射されていた水が止んだ。どうやら弾切れのようだ。

「よし、いける」

前へと忙しく動かしていた足を止め、田司は180度回転する。いきなり立ち止まった田司に合わせて、俺も何テナポか遅れて停止する。

少女の方を見た田司は、今度は少女に向かって一気に距離を詰めに行った。

「えっ……」

驚く少女に対して田司は冷たく言い放つ。

「お前、ちよつと跪け」

瞬間、少女の顔は苦痛に歪み膝をガクツと曲げて倒れこんでしまった。ちよつど背中になにか重いものを背負わされた時のように、少女は四つん這いになって必死に倒れるのを堪えている。

「ったく、手間取らせやがって。近づくのに一苦労したじゃねえか。おい、何で俺を捕まえようとしたんだ？」

傍から見ればそれは明らかに高校生が女子高生を脅しているようにしか見えない。しかし実際は、本当につい先ほど前は立場が真逆だ

ったのだ。下手をすればこちらが死んでしまっていたかもしれないほどに。

「つく……………！」

少女は答えない。歯を食いしばって、ただただ絶えるのみだ。

「お前、自分の今の状況を把握してるのか？ 俺の能力をもう少し強めれば手前の内臓ごとぶっ潰して圧殺できんだぞ？」

「なっ？」

その言葉に驚いたのは少女ではなく、俺だった。いくらなんでもそこまでする必要はないだろう。確かに俺達はかなり危険な目にあっただが、命で償わなければいけないほどのことをその少女はしていないはずだ。

「田司！ お前本気でその子を殺すつもりじゃないだろうな！？」

流石にそれはまずい。今はまだ田司は勘違いか何かで追われているのかもしれないが、人殺しなんて事をすれば明らかな犯罪であり捕まるのは確定だ。

そしてそれ以前に、人の命を奪うなんてこととして欲しくないし、誰かを死なせたたくも無い。そんなのは絶対にしてはならないことだ。

「それぐらいでもう十分だろ、田司。早く能力を解くんだ！」

しばらくの沈黙。少女の声の無い悲鳴だけがまわりに響いている。もしかしたら、既に通行人の誰かが別の風紀委員^{ジャッジメント}へと連絡をしてい

るかもしれない。

そうなるかと面倒だ。今の状況を見て、自分と田司が被害者だと言っても誰も信じてはくれないだろう。

「……………チツ、分かった。これ以上こいつに関わるのも面倒だしな」

そう言うと田司はそれ以上何も言わずその場を去っていった。

すると少女は、おぼつかない足取りではあるものの立ち上がり始めた。どうやら田司の能力はもう解かれたらしい。

「大丈夫……………かい？」

恐る恐る少女に声をかけ、手を差し出した。自分には敵意が無いことを表すために。

「……………」

しかし思惑通りにはいかず少女は俺の手は使わず一人で立ち上がった。しかし、またすぐに倒れそうになる。俺は思わずその倒れこむ少女の体を支えた。怪我をした腕が、一瞬鋭く痛み次第に和らいでいく。

「無理しない方がいい。何をされたのかはよく分からないけど、大丈夫ではないだろう？」

「……………ごめん……………なさい」

「えっ？」

少女は泣いていた。いや、もしかすれば最初に彼女を見たときから俺は気付いていたのかもしれない。

俺たちを見つめるその目が潤んでいたことも、必死で追いかけていたときも、彼女は泣いていたのかもしれない。

でも俺は何もすることが出来ずに、ぼんやりと少女を支えていた。

ふと、田司が歩いていった方を窺う。小さいながらも後姿が見えた。

それは制服が似合わない、何と無く物悲しい雰囲気を持つ後姿だった。

学園都市に来てまだ一日しか経ってないのか……。

予測していたとおり、俺たちの命がけの鬼ごっこを見ていた誰かが
風紀委員に連絡をしていたらしい。田司が去り呆然と少女を支えて
いた俺の元に2人の風紀委員がやって来た。

「大丈夫ですか？ 怪我はありませんか？」

いかにも真面目そうな生徒の風紀委員が俺に尋ねる。学園都市で
はない普通の学校にいたとしても風紀委員をしていそうだった。も
う一人は周囲にまだ犯人がいまいかどうかを探しているようだ。も
うこの辺りにはないだろうけど。

「ええっと……。少し腕を怪我しちゃいましたけど、大丈夫です。
それよりこの子方を助けてやってください。大分怪我がひどいみた
いで」

「分かりました。……ってこの腕章、この子も風紀委員じゃないで
すか！？ というか若石さん？」

どうやら今来たこの風紀委員の方はこの少女のことを知っている
ようだ。そう言えばこの子も風紀委員だったんだな。すっかり忘れ
ていた。てことは俺、というか田司は風紀委員に対して暴力をふる
っていると周りからは見えてたわけだよな？ あいつ大丈夫か……。

「この子は私たちの支部にいる若石 優です。一体どうしてこんな
事に？ あなたがやった訳ではないんでしょう？」

「そ、それは……」

俺は思わず黙り込んでしまう。確かに俺があの子ををここまでボロボロにしたわけではないが、知り合いが加害者だ。素直に言うのが一番と分かってはいるものの咄嗟とっさに言い出すことが出来なかった。

「その人は……悪くないです……。全部、私が……悪いんです……」

少女　もとい若石　は言消え入りそうな声で言った。しかしまだ若石の顔色は悪く、早く休ませた方がいいことは明らかだ。

今からすべきは犯人の調査ではなく、怪我人の保護だということをジャッジメント風紀委員は理解していたようで、

「……。あなたのその言葉がどういう意味かはまだ分からないけど、今は安静にしなさい。とにかく近くの病院へ急ぎましょう」

と若石を休ませることを優先した。そして次は俺の方に顔を向け、

「あなたも一緒についてきた方がいいわ。その傷、あなたが言うような“少しの怪我”には見えない。病院でちゃんとした治療をしてもらった方がいいんじゃない？」

「いや、俺は大丈夫です。それよりその子……若石さんを早く病院へ運んでやってください。自分は適当に応急処置を済ませるんで」

一応ここに来る前にもこんな風に腕に怪我を負ったことがある。しかし親は金もつたいたいと言って、病院へ連れて行ってくれなかったのだ。

それ以降、俺はほとんどの怪我や病気を自力でどうにかしてきた。

それに寮にも一応保健室のような色々な薬の置いている部屋がある。その薬品を使えばどうにかなるだろう。

「そう。あなたも無理はしないでね。それじゃ若石、行くわよ」

そういうとジャツジメント風紀委員の彼女は同僚を背負い病院へと向かった。まだ若石はぐったりとしてはいるが、背負われながら会話をしているよ。うなので意識はある程度しっかりとしているようだ。

それにしても田司の能力、あんなに強力だったのか。

今朝俺は自分の能力を使い他人を傷つけるのを拒んだ。しかし田司は拒むことはせず、躊躇うこともせずに自分の能力を使い人を傷つけた。

無論最初に襲ってきたのは相手で、その上こちらは半分命を狙われていたようなもの。何ふりかまっついていらなかったのは分かる。

分かってはいる。が、それでも目の前で人を傷つけるのはやめて欲しかった。そんなのは俺の自分勝手な偽善なのかもしれないけれど。

「……はあ、考えるのはこれぐらいにしよう。俺も早く寮に戻って治療しないと」

腕から溢れ出している血は確かにあの小さな少女、若石から受けた攻撃によって負ったものだ。でもその彼女も怪我を負ってしまった。その加害者は田司だがあいつも田司自身と、それに俺を守るために能力を使ったのだ。少々やり過ぎなようにも見えたが、それぐらいしなければいけないほどにお互いに追い詰められていたのだろう。

「何なんだろうな……。力これって」

おれは自分の得た能力に疑問を持ち始めながら寮へと歩き始めた。

・
・
・

「何って、超能力だよ」

「いやそういう意味じゃねえよ」

俺は自分の腕に包帯を巻きながら外内に突っ込む。

寮に戻った俺は、外内の軽い歓迎（暴言）に耐え抜き怪我の処理を始めた。そのついでに腕に怪我をした経緯を外内のやつに説明したのだ。

「君が言っただらう？ “何なんだらうな……。力^{これ}って” てさ。その質問に対する最良かつ最適な答えは“超能力だよ” 以外には見当たらないんだけどな。それとももしかして、自分の持つてる力の強さに恐れ^{おの}れいちゃったのかい？」

「恐れ^{おの}れくってほどじゃねえけどさ……」

実際自分のもつこの電撃^{エレクトロマスター}使いも田司や若石のものほど直接的ではないにしろ、使い方次第ではああなるだらう。本物の電撃を、しかも超強力な電撃を放つことが出来る能力者だって当然いるだらうし。

「なんて言うかさ。能力開発の対象って俺たちみたいな学生、つま

りは子供ばっかりじゃん？そんなガキがここまで強力な力を持って大丈夫なのかなって思ってた。ふとした拍子に人を殺しかねないだろ？」

「ふとしたことで人を殺すって言うのは、まあ無いだろうけどね」

「えっ、何でだ？」

外内の言葉に俺は疑問を抱く。中学生なら、どうでもいい些細なことがきっかけで喧嘩をするなんて日常的だ。

そこにあの強力な超能力が加われれば毎日が危険にさらされかねないと思ったんだが。

「超能力を使うって言うのは相当頭を使わなくちゃいけない。どこにどんな能力をどのように、それを強くイメージしつつ高度な計算もこなさなければいけない。そんなシビアで高度な事を頭に血が上っている子供ごときが出来ると思うかい？」

「ああ、そういえばそうだったな……。俺も能力を使ったけどあんまりそういうの意識してなかったんだが」

「そういうタイプの人もいるらしいけどね。無意識的に出来てしまう人間が。漢字を見てすぐに読み仮名がパツと思いつくみたいにさ。そういわれると何だか自分が特別扱いされている。褒められている、という感じがして嬉しいはずなんだが、外内に言われてもあまり嬉しくはなかった。

ここに入学するときは、そりゃまあよく分からないテストや複雑な計算問題を大量にやらされたが、それでも俺は比較的スムーズにそ

れがこなせたように思える。

まるでこの入学の模擬試験を何度も受けていたかのように。実際そんなことは全くしておらず、ほとんどぶっつけ本番だったのだが。

「そつえばさ外内。お前ってどんな能力なんだ？ 結構興味あるんだが」

外内はベッドに寝転んでいた上半身を重たそうに上げ、ゆっくりとこちらを振り返る。

「言わない。能力なんてテストの点数みたいなもんだしね。見せ合ったりするものじゃなく自分でそれをどう受け止めるか、だよ」

「何かお前と出会って初めてまともなことを言ったような気がするぞ」

そう言うと外内は少し口の端を歪ませた。笑っているのか怒っているのかよく分からない表情だ。

「まあ……ね。そうそう、君は知らないと思うけど僕たちの能力の開発のされ方ってかなり普通アブノーマルじゃないっていうのは知ってたかい？」

「普通じゃないって。どういうことだ？俺達はこの能力を……」

校長先生からもらった

んだろ？ どこでもそうじゃないのか？」

俺は当たり前前のことを確認するように外内に聞いた。

そう、どこだって。どこの学校だってそうなんじゃないのか？
学校に一人はいるという“能力生成”^{インストラブル}をもつ教師から能力を生み出してもらう。そうやって自分なりの能力を得るのではなかったのだろうか？

この疑問に対し外内は首を左右に大きく振る。

「全然。全くもってその考えは間違ってるよ。ていうか学校毎にいるって何？ 誰がそんなこと言ってたんだい？ まあいいや。とにかく普通は薬品の投与や電気などによる、脳への直接的な刺激を与えたりするんだよ。あとは催眠術なんかを使う方法もあるしいけどね」

「そう……なのか？ 知らなかったな、そんなの。まあ俺は最近学園都市^{こうち}に来た田舎者だしな。仕方ねえよ」

つい最近まで俺は“普通の学生”をやっていたのだ。そんな奴が学園都市なんていう未知の世界の常識なんて知っているはずも無い。こういうのに興味があるのならまだしも、親に半分無理やり連れて来られたようなものである俺は、まだまだここでの生活で驚くことがたくさんあるのだ。

それをあげればきりが無いのでここでは言わないが。

「普通ではないと知って少し不安かい？ そりゃ無理もないけどね君にとつてはまだ超能力っていうのは生活の中に溶け込んでるものじゃないだろうし。しかもそれが他人とは異なった手段で手に入れたとなれば、当然それなりの焦りというか未知のものに対する恐怖というか、そういうものは少なからずあるんじゃないかい？」

「そうかもな……。今日田司が風紀委員ジャッジメントに追われてたのだから、何故かよく分からないし。ていうか風紀委員が犯罪者か何かを追いかけたり、強行手段にでたりするのって普通なのか？」

ここでの常識をまだ把握していない俺からすれば、外内はからの情報はかなり重要なものである。こいつの助言なしで今後この学園都市で生きていくのは若干以上に辛いであろう。そう考えると一人部屋でなくて良かったような気もしてくる。久しぶりにポジティブな考え方が出来た。

「しないだろうね。普通は。というか普通じゃなくても。能力を使つて犯人を拘束するならまだしも、能力を使つて犯人に積極的な攻撃を仕掛けるというのはあまり聞かないな。多分それって軽い越権行為だろうしね」

「越権行為って、犯罪って事か？ 能力使つて危害を及ぼしたらやつぱり捕まるのか！？」

だとしたら今朝の“あれ”はどうなるのか。こんな科学の発展に全精力を注いでいるような都市だ。

そこら中に防犯カメラが敷き詰められている事だろう。そうなれば俺があの子を傷つけたのだからバレるのも時間の問題じゃ……。…。

「あゝ大丈夫。切り傷やかすり傷程度なら全然問題ないよ。どこの学校でも普通そうじゃないのかい？ それに相手から襲ってきたなら立派な正当防衛、捕まるっていうのはまず無いよ」

「そ、そうか……。はあ、よかつたあゝ」

上京三日でお縄につくなんていうバッドエンドは勘弁願いたい。

それにしても何だか妙な話だ。今日出会ったばかりの田司とそれを追いかける風紀委員ジャッジメントの若石。

さらに、他の学校とは異なる方法で得た能力。分からない事とか不安なことというか、そういうものが一気に増えてきたように感じる。

「ま、あんまり深く考えないことだね。その頭で。校内では『他の学校とは全く異なった新しい能力開発をしています』なんて言っても実際は他校とほとんど同じようなことをやっているかもしれないし。本当に全く新しい手段で能力を開発出来るんだったらもっとここに生徒がいてもおかしくないしね」

「それはそうかもしれないけどさ……。まあお前の言うとおりあんまりうだうだ考えても仕方ないか」

腕に包帯を巻くのがようやく終わった。上手く制服の袖に隠れるように巻くのに苦労したが、どうにかきれいに仕上がった。

「んじゃ、俺はそろそろ寝るわ。外内ももう寝るか？」

「ん？ ああ、そうだね。僕もそろそろ寝るよ。おやすみ」

「おう、おやすみ」

何だか少し考え事をしているようにも見えたが、気のせいだろうか？ 元々あいつは何考えてるのか分からない奴だしどっちでもいいか。

包帯が入れてあった救急箱を片付け、ベッドに潜り込む。今朝干していた掛け布団がフカフカで今日一日の疲れを忘れさせてくれる。

それにしても、今日はかなり密度の濃い一日だった。精神的にも肉体的にもしつかり体を休めて明日に備えよう。

目を瞑ればあつという間に俺はうつうつとし始めた。もうすぐ眠りに落ちるだろうと思ったときに、ふと後ろから声が聞こえたような気がした。

「^{レベル}強度5の^{インストール}能力生成か……。まさか、ね……」

それは夢の中だったのか、はたまた誰かが呟いた言葉なのか。それは決して分からない。

学園都市に来てまだ一日しか経ってないのか……。 (後書き)

はい、今回かなりの原作殺し《オリジンブレイカー》が出ました。
インストル
能力生成です。まだ原作は読んでいる最中であまり詳しくは無いの
で分かりませんが、こんな能力は無い……。ですよね？

今後も小説を読みつつ更新していくので、感想などがありましたら
是非お願いします。どこどこが悪いとか、読みづらい点や分かりづ
らい点などを書いて下さると非常に助かります。自分で読むとどう
しても独りよがりになってしまつので……。

読んでくれた皆様、ありがとうございます！

その部屋は黒かった。

深く暗く今が昼なのか夜なのか、自分が今どこにいるのか、生きているのか死んでいるのか。そんな何もかも分からなくなりそうになるくらいに、その部屋は黒かった。

その黒い部屋に一人の男と一人の女がいた。

男は椅子に座っており、漆黒のスーツを着ていた。この暗い部屋の中では黒いスーツが見えづらく、まるで体が無く顔だけが浮いているように見える。

その顔は無表情で顔には深い彫が出来ており、綺麗な顔立ちをしている。薄い笑みを浮かべたそのブラウンの瞳の置くには、何かを成し遂げようという強い思いが見え隠れしているようだ。

対して女はよく分からない格好だった。教師が着ているような服装にも見えるがそれ程キチンとしたものではなく、所々ボタンを閉めていなかったり寝癖が酷かったりと決して正装とは思えない。

男が何かを達成しようとしている目ののに対し、女は何も望んでおらずただ惰性に日々を過ごしているような、そんな瞳が眼鏡の奥に据えられている。

「そうか。一応仕事は達成したようだな。ご苦労だった」

「いえ、目標を殺しきることは出来ませんでした。達成どころか完全に失敗です。申し訳ありません」

お互いに無表情で向かい合ったままの会話。まるで間に見えない壁があり、お互いを目視せずに会話しているようだった。

「そんなことは無い。目標を昏睡状態にまで追い込んだのだろうか？ 私はむしろ殺すよりも効果的だと思うがね。殺してしまつては希望が無い。希望が残されているからこそ周りの者は彼女を助けようとする。まさに依頼どおりの状況に出来たじゃないか」

「依頼……。風紀委員を一人殺害、ある或いはそれに準じる状態にせよ」ですか。その上、可能ならば対象の身近な者の中に仲間思いの人間がいること、というのもありましたね」

女の表情にほんの少しの変化が 多少ではあるものの眉をひそめた mirれた。それは彼女も完全な無感情ではない事を表している。

「確かに変な仕事ではあつたが、十分な報酬はもらえたのだ。文句は言えまい。まあ、精々その“仲間思いの人間”に友達の復讐でもさせる気なんだろう」

男のその言葉に本心が含まれているのか、はたまたその場に合わせ適当に発言しているのかは分からないが、もし本心からの言葉とするならばこの男は相当性格が吹っ切れていると言つて間違いないだろう。

自分の部下の生徒に殺人を任せ、その結果新たな殺人が行われようとまるで他人事のように話すのだから。

「と言つてももう私たちには関係の無い話さ。仕事が完遂された後には依頼人とは関わらない。それが私のモットーでね」

「はい。承知しています」

男の言葉に答える女の顔は、もう先ほどの無表情へと戻っていた。

「そういえば、さ。今年の新入生に面白いのがいなかったかい？
名前は忘れてしまったんだが、はて何だったか」

これまでの仕事の内容のときは異なり、男の表情にも変化が現れた。それはとても単純な“興味心”から来るものなだろう。

「面白い？ 新縫君のことでしょうか？」

「新縫？ 何それ誰それどんなの？ 知らないなあ。もつとインパクトのある名前テレポルトでさ、空間移動系の能力が発生した子だよ」

女は手を口元にあて、少し考える。まだ生徒と出会ってそれほど時間がたっていない故、顔と名前、それに能力が上手く一致しないのだ。

しばらく経つとひとつの答えが浮かび上がった。

「もしかして……外内出入のことでしょうか？」

「そう！ それだよそれ！ あの子は面白そうだよ……。今後に期待大だ」

男は完全に先ほどまでの冷静さを失い、まるで見たことのない昆虫を見つけた出した少年のようにはしゃいでいる。しかしその喜びは、見つけた昆虫を“育成”する事が出来るからではなく“研究”することが出来るからだ。

男はそういう人種なのだ。新たな知識を得るためならば、ありとあ

あらゆる物を犠牲にすることを厭いとわないだろう。

「フフツ、楽しみだなあホントに。それじゃあ『片霧先生』、今後
も頑張つてあの子を教育してあげてください」

「こんな所でまで先生なんて言わないでください。あなたの方こそ
本当の先生なのですから」

「立場上僕は『校長』かも知れないけどさ、本業は研究者だよ？
だったら別に誰を先生と呼ぼうが勝手じゃないですか」

男は笑いながら言う。片霧と呼んだその女に向かって、本当に嬉し
そうに楽しそうに。

その笑顔は純粹で無垢で、そして何より狡猾で貪欲だった。

「……………。では私はこれで失礼します」

「ああ、ご苦労だった。それにしてもここでは普通に話すよね、君
外じゃ男だか女だか分からない話し方をするじゃないか」

「それは、その…………癖みたいなものですから。では失礼します」

女 片霧は、男の方に背を向け歩き出す。黒い部屋の出口に向か
つて。

ドアを開けると一人の生徒が挨拶をしてきた。

「あ、片霧先生！ こんにちは」

「ん、ああこんにちは。まだ学校にいたのか。早く帰らないと終点に遅れるわよ」

生徒は何故か不思議そうな顔をしている。どうしたんだ、と訊ねると生徒は元気に答えた

「先生の話し方って少し変だよね。男の人みたいだったり女の人みたいだったり」

その答に片霧は少し肩を竦めて応えた。

「ああ。よく言われる」

学園都市での邂逅

ぐっすりと眠ることが出来た俺は昨日よりも少し早く寮を出ることにした。今日もチンピラとエンカウトするとは思えないが早く行ったほうがいいに越したことは無い。

外内はもう少し寮の中で寝るそうだ。なんでも、あまり寝付けなかつたらしい。あいつでもそんな事があるんだな……、毎日10時間ぐらい余裕で寝てそんなものだが。

ドアを開けると一人の男子生徒がいた。制服が同じなので俺と同じ学校なのであるうが、見たことのない顔だ。と言ってもまだ数回しか登校してないわけだから、知らない同級生がいて当然なのだ。というか同級生かどうかすらもまだ分からない。

「やあ。おはよう新縫君」

男子生徒が話しかけてきた。なるほど、見知らぬ人にも積極的に挨拶できるタイプの人間なのか。俺もそんな風になりたいものだ。

……見知らぬ人？ だったら何故俺の名前を知っているんだ？ もしかしたら俺が忘れていただけで実際には以前にどこかで会ってるのかもしれない。

よく見ると向こうの方が年上のようなのだ。俺の学校では学年があがるにつれて腕に巻いている腕章の色が、赤、青、黒へと変化するのだ。なので俺は腕に赤い腕章を、対して相手は黒い腕章をしていた。

(ということとは3年生……先輩な上に最高学年なのか)

そんな年上の知り合いなんて覚えが無いな。と言うことはやっぱり

相手が人見知りのしない爽やかな好青年である可能性が高いが、一応知り合いかどうか質問しておくことにした。

「おはようございます。えっと……もしかして俺たちどこかで会ってます?」

「ん? いやいや、今日が初対面だけど。どうしてだい?」

「いや、どうして俺の名前を知ってるのかな……って」

やはり会ったことは無かったようだ。よかった、記憶に全然無いものだからとうとう俺の頭が麻痺し始めたのかと思った。

「ああ。それは僕がここの寮監だからだよ。といってもそんなにたいたことはやってないんだけどね。それにドアの横にネームプレートがあるからそれで名前も分かるし。外内君とは昨日会ったから、別の人となるともう一人の新縫君かな、と思って」

「なるほど。そういえばネームプレートがあっただな。忘れてました」

木製のドアには「187」と番号が彫られており、横の壁には「外内 出入」と「新縫 真希」と同じく木製の板に書かれている。ここに来た初日にこの番号を見つけられた時は、本当に嬉しかったなど2、3日前の過去を思い出す。

「ちなみに僕の名前は二束 三文。制服は同じだから学校も同じだね。一応3・Bだから暇だったらいつでもおいで」

二束と名乗る寮監さんは簡単に自己紹介をしてくれた。本当にいい

性格そんな人だなと感心しつつ、

「あ……はい、よろしくお願いします。それじゃ、俺はそろそろ失礼しますね」

と、俺はこの場を後にすることにした。致命的ではないにしろあまりここで時間を割くわけにもいかない。俺はバッグを背負いなおし、駆け足で寮の廊下を走り去った。

「あんまり速くは走らないようにねー」

後ろから二束さんの声がした。真面目だなあと少し鬱陶しくも思ったが、それ以上に俺は自分の役割に責任を持つ彼に好意を持った。変な意味ではなく。

・
・
・

無事に時間通り学校にたどり着いた俺は、まず田司を探すことにした。昨日のあの出来事があった以上無視するわけにもいかない。どうして風紀委員ジャッジメントの若石が田司を追いかけていたのか、それを知りたかった。外内の話では風紀委員ジャッジメントがあんな行動に出るのはとても珍しいようだし、何か引っかけがあるものがある。

しかし残念ながら田司は学校にはまだ来ておらず、結局放課後まで来ることはなかった。つまり学校を欠席したと言っわけだ。

昨日のような居残りイベントも無いので、俺はすぐに学校を出て家路につくことにした。寮路というのが正しいかもしれないが。

今日の学校も特に何かあったわけでもなく、ただ平凡と時間が過ぎていった。どうでもいいが先生の一人に笹崎ささき 傘鷺かささぎというややこしい名前の先生がいて、

『佐々木ささきではありません。笹崎ささきです！』

と授業中必死に何度も繰り返していた。しかしその努力も空しく、数人の生徒からは“ささき先生”と呼ばれていた。これもまた佐々木家……間違えた。笹崎家の運命なのである。でも、片霧先生と違い真面目そうな女性教師だったので困っている姿が可愛かったのも事実。今後もどんどん困ってもらいたいものだ。

そんな下らない授業風景を頭に描いていると、後ろから急に話しかけられた。

「来なかったね。田司君」

声の主は外内だった。口には昨日の朝のと同じようなするめいかがくわえられている。おそらく近くのコンビニで購入したのだろう。コンビニという言葉を聞くと昨日のポテトチップスが思い出され、コンソメ何たらを買いに行こうかと少し悩んだがやめておく事にした。

「そうだな。やっぱりあいつ何か怪しい……と言つか不自然な感じがするよな」

田司を疑うべきなのかそうではないのか。俺にはまだ判断しかねる

が、昨日のあの出来事のあった次の日に学校を休むというのは、やはり何かあるような気がしてくる。かといって俺にはどうすることも出来ない。具体的になにをすればいいか、まるで見当もつかない。

「不自然、ねえ。むしろ不自然なのはその風紀委員、ジャッジメント若石って子の方じゃないかい？」

「若石が？　なんで？」

外内はするめを噛み切り、それをよく咀嚼そしゃくしてから答えた。

「昨日も言ったでしょ、ジャッジメント風紀委員は普通犯人に危害を加えない。よほどの事件じゃない限りはね。話を聞くには田司君が何かをしたわけではなく、若石さんの方から交戦しにきたんでしょ？　普通に考えて疑うならその若石さんだと僕は思うけど」

「んー……。そう、かもな」

うつかりしていたが今回の被害者はあくまで『田司』の方だった。若石が最初に襲い掛かってきて、田司はそれに応戦しただけなのだから。結果的に怪我を負ったのは若石のほうだったが。

（それに田司の雰囲気は途中から明らかに変わってたしな）

若石を追い詰めたときの田司は正直怖かった。本当にあのまま殺してしまうのではないか、と不安にさせられる程の殺気があったからだ。

「若石さんがジャッジメント風紀委員っていうのは分かってもどこの支部か分からないと探るのが面倒そうだしね。とりあえず、この事は忘れて普

通の学校生活を送れば？」

呑気ではあるがそれが一番良い判断だろう。少し、いやかなり気にはなるものそればかり考えているわけにもいかないしな……。

ふと、目の前の喫茶店を眺めた。特に理由は無い。ただ何と無く眺めただけだ。

その喫茶店に若石がいた。

「!?!」

周りには誰もいないようなので、友達と一緒に来ているわけではな
いようだ。昨日の傷はあまり深くなかったようで、ここから見える
範囲では包帯などはしていない。当然俺のようにどこかに隠してい
るかもしれないが。

声には出さないが目の前の現実に驚く。この偶然は喜ぶべきなのか
それとも恨むべきなのかは分からないが、このうやむやを取り払う
には彼女に話を聞くのが一番なのは間違いない。

「外内、お前先に寮に戻ってくれ」

「ん？ どうしてだい？」

「その……。コンソメナントカ、買ってくる」

「コンソメ何とか？ ああ、コンソメパンチの事か。確かにあれは

無性に食べたくなるときがあるよね。どうぞ行ってらっしゃい」

とっさの思い付きだったが何とか誤魔化せたようだ。別に外内が一緒でもいいが、何と無くあいつが一緒だと話が面倒くさくなりそうな気がする。寮に帰ってから正直に話そう。

「それじゃ、また後でな」

「ん、じゃあね」

軽い別れの挨拶を済ませると、外内に気づかれぬように喫茶店に入っていく。別に悪い事をしてはいないのに周囲の視線が気になっってしまう。周りから見れば逆に怪しいと思われるそうなので、出来るだけ自然を装って颯爽と喫茶店へと向かう。

入店してからもう一度外を見ると外内の姿はなかった。よかった、どうやら気づかずに帰ってくれたらしい。

店内はなかなかの賑わいを見せており、その客のほとんどが自分や若石と同じ学生だ。と言うか全員と言っても過言ではないかもしれない。その中で若石は一人でポツンと端の方の席に座っていた。

そんな若石に小走りで近づいて話しかけようとするが……。

（これって普通に『よう、若石。元気そうだな』とか話しかけて大丈夫だよな？）

俺は昨日、別の風紀委員シヤッジメントの人から若石の名前を聞いているが、若石からすれば俺なんて名前も知らない他人だ。そんな他人の男子から話しかけられたらナンパと思われるても文句が言えない。

そんなこんなで話しかける事も出来ずにテーブルの周りをうろつろしている、若石がこちらをチラッと見た。

「……………！？ あ、あなたは昨日の！ あ、あの、すみませんでした！」

「えっ、ええ？ 何で急に謝るんだ？」

出会って最初の言葉が謝罪というのは何だか気分が悪い。

「だって昨日は、無関係なあなたを巻き込んだじゃって……………。しかも怪我させちゃって……………。その上助けてもらったのにお礼も言えてないんですよ！？ 私駄目駄目です……………」

そして第二の言葉は自虐の連発だった。しかも、すごい早さで立ち上がると共にさらにすごい速さで何度も頭を下げながら「すみません！」を連呼してきた。やばい。すごい罪悪感に苛こまれてきた。

「と、とにかく座って。というか頭を止とめて！ 少し話を聞きたいだけなんだよ」

「すみませんすみませんすみません……………。え？ 話、ですか？」

呪いの呪文のごとく紡がれていた言葉が止やみ、ようやく会話が出来る状態になった。若石はまた「あ。す、すみません」と謝ってから椅子に座りなおした。

「それで、話っているのは何ですか？ ええと……………。名前はなんでしたっけ？」

「俺は、新縫 真希って言う名前だ。女っばいけど気にしないでくれ」

若石の向かい側に座りながら自己紹介をする。さっきの怒涛の“ごめんさい連発”のおかげで、周りから幾つもの視線を浴びせられるハメになったが、気にせずウェイトレスにサイダーを注文をする。

「じゃあ、新縫さん。話って何ですか？ やっぱり、昨日の事……ですか？」

「まあ、そうだな。もし話にくい内容だったら無理に話さなくてもいいけど」

若石の表情が若干曇る。やはり積極的に話すような内容ではないようだ。………下らない駄洒落だしゃれになってしまったことに内心腹が立つ。

そんな事を知りはしない若石は、これまでの弱々しい言動とは裏腹に力強い目で俺の方を見ながら言った

「いえ、話します。巻き込んでおいて事情は聞かないで欲しいと言っつのは虫が良すぎますから」

「そうか。ありがとう、若石さん」

「若石で良いですよ、私の方が年下ですから。そういえばどうして私の名前をご存知なんですか？」

少し照れながら若石が呟くとともに、俺に疑問を投げかける。

「それは昨日の風紀委員シヤッジメントの人が言ってたんだよ」

「ああ、そう言えばそうでしたっけ？ 忘れてました」

忘れていた、ということは田司からあれ程の攻撃をくらっても意識がハッキリしていたっていうことか。見かけに似合わずすごい精神力の持ち主のようだ。

「ええっと……。そうですね、私が彼を追いかけてた理由なんですけど……」

そのとき俺は、若石にどんな理由を言っただけで欲しかったのだろうか。いや、そんな明確な“言っただけで欲しい理由”なんか最初から無かったのだろう。自分ではどうしようもない疑問を偶然出会った若石が解決してくれる、そう思って話しかけた。それだけなのだ。

だから本当はこんな質問をするべきではなかったのかもしれない。若石を見かけても気にせず、いつも通りに帰ってしまえばよかったのだ。けどそれをしなかったのは、それほど田司の事が気になったのか、それとも

単純に若石を助けたいと思ったからなのか。

昨日若石が、俺と田司を襲ってきたのは事実だ。けど、それだけが全てでは無いような気がしていた。たいした理由なんてものは無いけれど、強いて言うならそれは彼女が俺に『ごめんなさい』と言ったからだ。

それはまるで、自分の行いが間違っているのが理解できているのに
そうするしか道が無い。そんな自分を悔いるようだった。だからそ
んな状況から若石を助けたい。そんなマンガか何かの主人公気取り
な考えを俺はもっているのかも知れない。

しかし、そんな下らない自尊心を若石の言葉は綺麗に砕いてくれた。

「その……。私の友達が、あの人に殺されたんです」

学園都市の現実

『私の友達が殺された』

そういわれた瞬間、空間が凍りついたような時間が止まったような。そんな錯覚がした。

つまり若石わかいしの言葉の意味が理解できなかった。いや、脳が理解するのを拒んだような、ような感じがした。

その言葉の意味なんて改めて聞くまでも無いだろう。けど俺は聞きなおさずにはいられなかった。

「殺された……って、どういうことだよ!？」

淡々とした若石の予想外の言葉に、俺は声を荒げてしまう。いや、『予想外』なはずは無かった。昨日のあの戦闘、下手をすれば死闘とも言えそうなあの戦いを見て『命』が関わっているという事に気づかない方がおかしいだろう。

「殺されたと言っても、本当に死んでいるわけではありません。『仮死状態』あるいは『植物人間』。医師からはそんな風に言われています。ただ……」

「ただ?」

あまりにも意味深過ぎるその言葉に俺は緊張した。嫌な予感しかない。

「……ただ。その友達、虚姫うつひめっていう私と同じ風紀委員シヤッジメントなんですけど。虚姫さんが目を覚ます可能性は現状ではあり得ない、とも言われませんでした……」

声が震えている。きっと涙を堪えて話しているんだろう。さっき以上の罪悪感に俺は苛まれる。

驚いたと言うよりも、正直俺には現実味が湧わかなかった。昨日一緒にいた同級生が殺人犯なんて急に言われても、はいそうだったんですか驚きました、なんて答えられるはずが無い。

が、それ以上に目の前の少女が嘘を言っているとも思えなかった。田司がそんなことをしたなんて思いたくは無いけど、昨日のあの様子なら 若石に対するあの様子なら、本当に田司はその虚姫という子を仮死状態にまで追いやったのかもしれない。

……仮死状態？

そういえば『仮死状態』とは一体どういう意味なのだろうか。それにどうして田司たつかさが犯人だと分かったのかも気になる。

「一応聞くけどさ、若石。仮死状態っていうのは具体的にどういうことなんだ？ 生きてはいるんだろ？ それに、何で田司がそれをやったって分かったんだ？」

「虚姫の場合は、心拍数が極端に少なくなっているそうです。周りから見れば眠っているようですけど、実際はかなり危険な状態だそうです。しかも、それを直すためのワクチンを作る事は困難だった……」

表情が一段と暗くなっていく。コーヒークップを持つ手が小刻みに震えていて、落としてしまいそうになっているのが見えた。

「それと、その田司さんが虚姫を襲ったという証拠は監視カメラです。彼がスタンガンで虚姫を気絶させ、その後注射のような物を刺しているのが映っていました。昨日会ったあの人に間違いありません」

「注射？ だからワクチンが必要なのか……。それで田司を捕まえてどうするんだ？ まさか復讐……」

俺が言い終える前に若石が大きく首を振り否定した。

「ち、違います！ そんなことをするつもりなんかじゃありません！ 私は彼から情報を得たかったです。虚姫が助かる手段を知っています。注射をした田司さんぐらいですから……」。

それで昨日、偶然出会った彼に話を聞こうとしたら『何の事だ？俺はそんな奴知らねえし、そんなどうでもいい事に時間を使ってられるかよ』ってとぼけられて。それにどうでもいい事なんて言われたから、パトロール中にも関わらず田司さんに独断で襲い掛かってしまいました……」

「そう、だったのか……。でも、

「でもそれって本当に田司君なのかい？」

「！？」

突然、横から俺の言葉に合わせて誰かの声が聞こえた。驚いて声のした方を見ると、そこには堂々とした姿で、まるで最初からそこに座っていたと言わんばかりに声の主がいた。

「外内！？　なんでここにいるんだよ、お前！」

そこには、先ほどのするめいかにアイスココアがプラスされた外内たたくが佇んでいた。

「やあ、新縫君あらめい。こんなところで会うなんて偶然だね」

「思いつ切り必然だろうが！　先に帰ってたんじゃなかったのかよ」

先ほどまでのしんみりとした空気が嘘のように、俺は大声で叫ぶ。若石はあっけに取られたように呆然としており、手にしたコーヒークップがバランスを崩して今にも落下しそうになっていた。

「いや帰ろうとしたんだけど、何だか君が拳動不審な動きをしているから気になって追いかけてきたんだよ」

「追いかけてって俺の後ろをか？　全然気づかなかったぞ！」

何度も何度も注意してきたというのに、こつもあつさりと俺の目を掻い潜ってこられると少しへこんでしまう。恐るべし外内の尾行能力。

「あの、新縫さん？　この方は誰でしょうか……？」

外内のことを不信がっているのがよく伝わってきたので、誤解を解くためにも丁寧の説明してあげる事にした。

「こいつは外内そとうち 出入でいり。俺のルームメイトなんだ。性格はあんまり良くないけど根は多分良い奴だから安心してくれ」

「ずいぶんご丁寧に紹介してくれるね、新縫君。一応僕は後ろの席で君の行動の一部始終を見てたけど、急に年下の女の子にナンパしたかと思ったらその女の子に何度も謝らせて、拳句の果てには泣かせそうにしちゃうなんて。一体どういうことだい？ 入学早々、年下の彼女でもつくる気かい？」

「きれいに勘違いをしてんじゃねえよ。お前は」

どうやら外内は俺がこの喫茶店に入った直後から俺を監視していたらしい。やれやれ……、おかげで今度から喫茶店に入る時は、周囲に細心の注意を払わなければいけなくなった。

「冗談だよ、新縫君。そんな死にそうな顔をしないでくれ、謝るか
らな」

「俺、今そんなに不健康そうな顔になってたのか!？」

「冗談だよ」

「……………」

話が大きく脱線してしまったので、今一度レールに戻すしよう。

「じゃ、再度質問をしようか。君がその監視カメラで見た田司君は本物の田司君だったのかい？」

俺に代わって、外内が改めて若石に訊ねる。どうやら後ろの席で俺たちの話を完全に盗み聞きしていたようだ。

「本物ってどういうことだ、外内？ それじゃまるで“偽者の田司”もいるみたいな言い方じゃないか」

人間に偽者の本物も無いだろう。誰だって世の中には一人しかいないのに、偽者なんて存在するのだろうか？ まさか科学の発展したこの学園都市では、クローン人間が大量に生み出されてるとかじゃ……。

「文字通り“偽者”だよ、新縫君。簡単に言えばメタモルフォーゼ肉体変化のことを指してるんだけどね」

「メタモル……フォーゼ？ それって何かの能力なのか？」

俺は外内に聞いたのだが、若石がその質問に答える。

「メタモルフォーゼ肉体変化。簡単に言えば変身みたいなものです。自分の姿、形、声その他様々な身体を作りえる能力なんです」

「そうそう、それで田司君に化けて濡れ衣を着せてるんじゃないかい？ だって変じゃない？ あの重塞領域グラビティエリアを使える田司君がわざわざスタンガンなんて使って相手を気絶させるなんてさ。それに、普通そんなことをするときには監視カメラには最大限注意するはずだよ？ スタンガンまで用意しておいて監視カメラに気づかないなんておかしいよ。まるで“わざと映っている”みたいじゃない」

外内の言うことには、かなり説得力があるように俺は感じた。

しかし、外内のその意見は若石に簡単に否定されてしまうことになる。力なく首を振りながら、若石は言った。

「もちろんその線も書庫バンクで調べました。けど、虚姫さんが襲われた時には全員にアリのバイがあつて無理なんです。肉体変化メタモルフォーゼはそれ自体稀有な能力ですし、その可能性は低いと思います……」

書庫バンクとは、この学園都市のありとあらゆる情報が網羅されている最大級のデータベースの事だ。そこには学生の能力や強度レベルに至るまで、様々な情報が詰まっている。

「でもそれは所詮、書庫バンクの範囲での話でしょ？」

「所詮と言つても、外内さんは書庫バンクにのっていない情報を知っているとでも言つんですか？」

若石の言うとおりだ。たった一人の学生の知識と、学園都市全体に張り巡らされた情報網。どちらの方が上回っているかなど比べる必要もない程に明らかだ。

それでも外内は言う。当然のように、当たり前前の知識を語るように。

「書庫バンクに載っていることが全てじゃない。現に僕や新縫君がそれを証明しているからね。僕たちは能力があるのも関わらず、書庫バンクの情報ではレベル0、つまり無能力者の扱いを受けているんだよ。どうしてだと思つ？」

「それは……。例えば、身体検査システムスキャンでは計ることのできない能力を持っている、とかですか？」

「いや、僕たちは二人とも計測可能な能力だよ」

その答えを聞き、若石は訝いぶかるようにもう一度外内に尋ねる

「だったらどうして……」

「簡単な話。僕たちの能力は“超能力として認められていない”からだよ。何故なら、能力の開発方法が他とは異なるから」

その言葉を聞いて俺は昨日の話を思い出す。

インストール
能力生成。

他の学校とは一線を画す方法で、能力を開発ではなく『発生』させる能力。俺たちはその能力生成インストールによって超能力を手に入れた。

「なあ、それって能力生成インストールのことだよな？」

「ん？ ああ、そうだよ新縫君。よく覚えていたね、君の中では記憶時間最長記録じゃないのかい？」

「そこまで何でもかんでも忘れねえよ」

「あ、あの。そのインストールインストールというのは何のことなのでしょう？」

若石が俺たちに訊ねてくる。本当に能力生成インストールというのは特別な存在なんだと再認識させられる。

俺と外内は　　と言っても俺はほとんど何も言わずに相槌をうつて

いただけどが 若石に能力生成インストールの説明を簡単にした。

しかし、その表情は信じているような、疑っているような、まさに半信半疑といった表情だった。

「そんな……！ 能力を発生させる能力なんて本当にあるんですか？」

「疑いたくなるのは分かるけど、現実こうして僕らは能力を手に行っているからね。ま、とにかくこんな方法で能力を手に入れた学生が数百人はいる。その中には肉体変化メタモルフォーゼのような能力者もいるかもしれない」

外内は年下の少女に勉強を教えるように言った。優しそうではないが、穏やかそうな口調ではあった

そして同時に、俺はひとつの決意をした。外内の言う事が本当なら俺たちのいる学校に、虚姫さんを襲った犯人がいる可能性がある。だとしたら、絶対にそいつを許すわけにはいかない。

田司に疑いを向けさせ、虚姫さんを仮死状態にまで追いやって、そして若石をここまで悲しませた人間が自分の近くにいるかもしれない。

それなら俺のすべき事は簡単だ

「外内。今の話は全部本当だよな？」

「うん。一切合財いっさいがっさい、全部が全部事実だよ。」

なら安心した。外内をどうしてここまで信用しているのか自分でもよく分からない。それほど仲良くなった覚えも無いのに、何故かこいつの言葉には説得力があった。

「じゃあ外内。今度こそおまえは寮に戻ってくれ」

そして、立ち上がりながら続ける。

「俺は学校に戻ってその変身野郎を探し出す」

「そ、そんな！　そこまでしてもらわなければいきません。あとは私が自分で調べますから！」

若石が慌てたように言うが俺は耳を貸さない。そのまま喫茶店の出口へと向かう。

「待ちなよ新縫君。その情報源は僕なんだから、当然僕も責任をもつてついていくよ」

俺の後を追うように外内も立ち上がった。

そこで俺は気がついた。多分俺が外内を信用できたのは、こいつがこういう性格だからなのだろう。

何だかんだ言っても俺と同じように目の前の困っている人間を放っておけない、お人好しな性格。

自分に利益が無くても。無駄だったとしても。意味が無いとしても。

それでもやれる事は最大限やりきろうとする性格。

全くもって俺と同じ^{おんな}性分だ。

「んじゃ、若石。ちょっと“田司の疑い晴らし”に行くから、お前は関係ないぞ。ああそれから、テーブルの上に代金は置いといたから払っていきなさい」

そついうと俺はさっさと喫茶店を後にした。外内も遅れて出てくる。

「ツンデレだねえ、新縫君。『田司の疑いを晴らしに行くから、お前は関係ないぞ』なんてさ」

「そつでも言わねえとあいつ認めてくれないだろ？ やむを得ずつてやつだ」

俺と外内は二度目の登校のために歩き始める。時間は午後4時過ぎ。何人もの学生たちが寮へと戻って行く中、俺達は真逆の学校へと向かっていく。

学園都市の事実

学校へと向かう俺達は日が暮れかけている街中を歩いていた。まだ4月の中頃だというのに今日は蒸し暑く、後ろのオレンジ色の太陽が背中をジリジリと照りつけていた。

「なあ外内。一応聞くけどさ、どうやってその肉メタモルフォーゼ体変化のやつを探し出すんだ？」

「ん？ さあ、考えてないね。新縫君こそ何か妙案があるんじゃないのかったのかい？ そうだと思ってついでにきたんだけど」

喫茶店を出て数分。俺達は毎日学校へ行くときに通る、いわゆる通学路を歩いていた。学校が近づいてきたようで、自分たちと同じ制服の生徒も何人か見かけた。

「俺がそんな妙案を思いつくはずないだろ。その場の雰囲気と言っか、一時的な感情で言っつまっただけど結構大変そうだよな。これ」

「やれやれ……。何とかなるといいけどね」

「そうそう、楽観的にいこうぜ。なんとかなるって」

更に歩いて数分。俺達は本日3度目の校門をくぐるうとしていた。

と、そこに一人の先生がやってくる。見覚えのあるその若い先生はよく見ると笹崎先生だった。腕にいくつか大き目の封筒を抱えていて、バランスを取りながらおぼつかない足取りで歩いている。

その笹崎先生が俺たちを見つけたらしく、てくてくとこちらに近づいてきた。

「あら。新縫君と外内君。どうし……きゃあ！」

可愛い悲鳴とともに、腕に抱えていた封筒がバサツと音を立ててあたり一面に散らばってしまった。これを全部片付けるには中々時間がかかりそうだった。

「あっちゃー。悪いけど二人とも、それ拾ってくれない？」

「はい……、分かりました」

「仕方ないね」

しびしび俺達は地面に散らかった封筒を拾っていく。なかには封筒の中身が出てしまい、中の資料まで飛び出しているものもあった。当然その資料も元に戻さなくてはならない。

「はあ……。何か気分が台無しになったような……」

そう愚痴を垂らしながら資料を片付けていると、気になる文字が目に入った。

（生徒能力強度^{レベル}一覧？ これって！！）

俺は封筒を片付けているふりをしながら、合間を縫ってその資料に目を通していく。もしかすればこの中に^{メタモルフォーゼ}肉体変化の能力者が載っているかもしれない。

エアロシューター
（風力使いじゃない、読心能力でもない、水流操作も違う、肉体再生、これでもない！）
サイコメトリー
ハイドロマスター
オートリバ

上から順に見ていくものの、どうしても肉体変化を見つけない事がない。この学校には肉体変化の能力者はいないのか、と疑い始めたとき。

テレキネシス
（念動力でもない、肉体変化……！ あった！！）
メタモルフォーゼ

俺は急いでその項目をチェックする。

メタモルフォーゼ
肉体変化 該当者 1名 強度 およそ3 学年3
クラスB 名前……

『およそ』という言葉が気になりはしたが今回はそれに構っている暇はない。その能力者の学年、クラス等を順番に見る。そして俺は名前を見て驚愕した。その名前には聞き覚えがあったからだ。でも、

「でも、よりによってこいつ……なのか？」

「ん？ どうしたの新縫君、何か面白そうな資料でもあった？」

そういつて笹崎先生が歩み寄ってくる。別に何もやましい事はしてないのだが、反射的に読んでいた資料を封筒の中に収め、その封筒を渡す。

「い、いえ別に！ 何でもないです。はい、これどうぞ」

「何だか怪しいけど、今回は手伝ってくれた事に免じて見逃します。それにしても、あなた達どうしてこんな時間に学校に来たの？ 忘

れ物？」

笹崎先生は、俺と外内に渡されたいくつもの封筒を集め、きれいに整えてから「よいしょっ」と言いながらそれを持ち上げる。

「はい、忘れ物です。今日の課題に必要なノートを忘れてしまったんです。新縫君には偶然そこであったのでついて来てもらいました。彼はとても優しいですから」

と、外内が俺の評判を勝手によくしながら先生の質問に答える。それは遠回しに、俺の今日の若石に対する紹介を批判しているという事なのかもしれないが無視する。

「それでは笹崎先生、さようなら」

「あら、名前覚えてくれたのね！ 嬉しいわ」

最後まで教師に対する心配りを欠かさない外内だった。

さて、それよりも重要な事が判明した。予想外の出来事のおかげで犯人探しの時間を大幅に短縮する事ができたが、それがかえって怪しいようにも思えてしまう。だがそんなことを気にして疑心暗鬼に陥っている場合ではない。

「外内、さっきの封筒の中に能力者の一覧表みたいのがあってさ」

「うん。僕も見たよ」

「な！？ お前そんなに目が良いのかよ！」

「冗談だよ。で、その一覧表に載ってた名前は？」

いつもの下らない冗談も今は笑えない。いや、いつも笑えはしないのだが。

「そいつ名前は、“二束ふたば 三文みふみ” あの寮監の人だよ」

「へえ……。それはそれは」

脅すつもりでいったわけではないのだが、多少のリアクションを期待していた俺は何と無くガツカリしてしまった。こう、外内が「ななんだって！ それは本当かい！？」とか取り乱している姿とかを見たかったのだが、この程度のことではまるで外内は動じていなかった。

「それは中々“面白い”じゃないか。僕の予想外の答えだよ、新縫君」

「面白いって……。お前、自分の知り合いが犯人だと分かってそのセリフはおかしいだろ？ もう少し、何というか。悲しんだりしないのか？」

「僕が悲しむだって？ 新縫君は僕がそんなにセンチメンタルな心を持ち合わせた人間に見えるのかい？」

自嘲気味に言うでもなく、それどころか軽く含み笑いを浮かべながら外内は俺に問いかける。

そう言われてしまえば確かに外内が悲しんでいる様子なんて想像できない。だが、それにしたってもう少し場に合った反応と言うもの

があると思う。

「ま、お前がそんな簡単に悲しむわけないか。んでどうする？ 早速、二束を探しに行くか？」

「何のあてもなしにこの学校から生徒一人を探すなんて、僕さえできっこないのに君に出来るのかい？ 迷いに迷って結局何の成果も挙げられないのが関の山だと思うけど」

「くっ……確かに……。適切な判断過ぎて言い返せない」

自分の方向音痴っぷりは自分自身が一番よく知っている。つもりだが、案外周りの方がよく分かっているのかもしれない。

しかし、そうなるとどこに向かうべきか。直接二束を探せない以上、次にいくべき場所と言えよ。

「とりあえず職員室にでも行ってみようよ、新縫君。教室の鍵をかしてもらつという名目上でいけば問題ないでしょ？」

俺達は職員室へと向かう事になった。

・
・
・

「二束 三文？ ああ、そいつなら多分図書室にいるだろうな。毎日放課後になつたらすぐに職員室に来て鍵を借りに来るんだよ、あいつ」

「図書室ですか。分かりました、ありがとうございます。片霧先生」職員室に来た俺達は、まず自分たちの教室の鍵を借り、それから片霧先生に二束について訊ねていた。外内と先生の話の聞いている限り、どうやら二束は図書室にいるらしい。

「しかし、二束に何か用でもあるのか？ 三年のあいとお前たちに何か接点があるとは思えないのだけれど」

「彼は寮監ですから僕とは面識がありません。それで、勉強を教えてもらおう事になったんです。いろいろと面白そうな話も聞けそうですし」

「面白そうな話……ね。あまり長時間残るのは止めてくれよ」

「はい先生。では、失礼します」

外内が挨拶したのにならつて俺も軽く会釈をする。それにしても、どうして外内はあんな風に片霧先生と上手く話せるのだろうか。俺なんてまともな会話をする事すら困難だと言うのに、それをいとも簡単にこなした上に情報まで聞き出すとは。もう感心せざるを得ない。

「さて新縫君。今から僕は図書室に行くわけだけど、君は入ってこないでくれるかい？」

「えっと、何でだ？」

外内は面倒くさそうに頭をかきながら答える。

「単純に、逃げられたそうになったときの見張り役というのが1つ。もう1つは僕が二束君に自白させる際に、君がいると邪魔になる可能性があるからだよ」

「邪魔って……。随分ばつさりと云ってくれるなあ、お前」

「仕方ないよ。僕は思った事は素直に言える子だからね」

いつも通りの下らない会話をしているが、俺は内心かなり緊張していた。こんな経験は初めてだ。他人を助けた事は何回かはあるだろうが、助けるために誰かを捕まえる。そのためには当然ある程度の覚悟は必要だろう。相手を傷つけるという覚悟が。

図書室は1年生の教室が集まっている第一校舎ではなく、そこから渡り廊下で移動した場所である第三校舎の二回にあるらしい。当然俺はそんな所に来た事はないので、一人ではものの数秒で迷子になっていただろう。

タイルが敷き詰められた廊下を歩きながら目標の図書室を探す。どうやらこの第三校舎には三年生の教室が集まっているらしく、数人の三年生の先輩たちとすれ違った。全員珍しそうに俺たちを見ていたので、どうやら他の学年がこの校舎に来る事はあまりないようだ。

「あつたよ。ここだ」

外内は立ち止まり、他の教室とは明らかに違う大きな部屋を眺める。

外観を見るには普通の教室の5〜6倍といったところだろうか。俺がここに来る前にいた中学校の図書室よりも大分大きいように思う。

中を窺うと人気はなく、がらんとしている。横長の机の上には何冊かの本が片付けられずに放置されている。そして、その幾つかの本が置いている机のさらに向こう側に一人の生徒が座っていた。

「二束三文、ちゃんといるみたいだね。それじゃ新縫君、頼んだよ」

「あ、ああ。分かった」

俺は入り口より少し離れた場所に移動して、外から図書室の中を窺う事にした。

・
・
・

「こんばんは、二束さん。お元気そうで」

外内は淡々と、いつも通りの口調で二束に話しかける。それは今から犯人を捕まえようとしているようには到底見えなかった。

「あれ？ 君は、確か外内君だよな。どうしたんだいこんな時間に他の生徒はもうみんな帰っちゃったよ」

対して二束も同じように返答する。それはやはりいつも通りの口調であり、いつも通りの微笑を浮かべていた。彼が人を襲ったというのはあまりにも信じがたい話のようにも思える。しかし、現実はその見かけだけで決まるものではない。巨大な動物が案外臆病だったり、逆に小さな小さな動物がこの上なく凶暴だということだってあ

る。

「いえいえ。今日はあなたに用があるんですよ、二束さん」

「僕にかい？ 何かな。答えられる範囲ならなんでも答えるよ」

二束は親切にそう答える。それが余計に彼を疑う気を無くさせる。

ように思えるが、外内にはまるで関係ない。どれほど見た目が無害なようでも中身までそうとは限らない。彼にとっては人の外側も内側も無関係なものなのだ。

「質問1、若石という子をご存知ですか？」

「若石？ いや、知らないなあ……」

「質問2、虚姫という子をご存知ですか？」

「……。いや知らないけど、その子達がどうかしたのかい？」

外内は答えない。ただ一方的に質問を繰り返していくのみで、まるで録音されたテープを再生しているようだった。

「質問3、最近スタンガンを使って人を襲った事がありますか？」

「っ」

少し。本当に些細だが、二束がその言葉に反応した。そして、一瞬の沈黙の後、

「どついつ、意味だい？ さつきから。君の質問の内容がいまいち分からないんだけどな」

「質問に答えてくれませんか、二束さん。最近スタンガンを使って人を襲った事がありますか？」

同じ抑揚で、同じ速さで、同じ言葉を、外内は淡々と吐き続ける。二束は、まるでテレビと会話をしているような気味の悪さを感じていた。目の前の外内という少年に“現実味がない”のだ。

「ないよ、そんな事。僕はスタンガンなんて持ってないし、女の子も襲っちゃいない」

「質問4、監視カメラにあなたがジャッジメント風紀委員を襲っている様子が映されていましたが、どうなのでしょう？」

二束が思い切り机を叩く。ダンツと机が大きく震え、数冊の本が床に落ちる。

「いい加減にしてくれないかな、外内君。僕はそんなことしてないって言ってるだろう？ どうして僕がその若石とか虚姫とか言う女の子を襲わなくちゃいけないんだよ！」

それでも外内は動じない。最初にこの図書館に入ったときの姿勢のまま、顔色一つ変えずに二束を見つめ続けている。それが余計に二束をイラつかせた。

「質問5、どうしてあなたは若石と虚姫が“女の”子と分かったのですか？」

その言葉の瞬間、互いの表情が一変する。

それまで憤っていた二束は顔から血の気が引いていくのが目に分かる。立ち上がりかけたその体勢のまま動かなくなってしまった。

それに対して外内は先ほどまでの無表情とは打って変わって、口の端を大きく吊り上げ笑っている。そしてその目は二束をじっと見つめたまま瞬き一つしない。

「やれやれ、ようやくボ口を出してくれましたね。というか、案外すぐに出ちゃいましたね。他にも幾つか鎌をかけるためのセリフは用意していたんだけどね……。例えば、『カメラに映っていた田司君は右利きだった。本物は左利きですよ』とかね」

「あ、あいつは左利きだったのか!？」

「いや、冗談なんだけどね」

外内は完全にもとの外内へと戻っていた。嫌な微笑と虚ろな瞳、そしてセリフを読むかのような饒舌。それら全てが二束をじわじわと追いやっていく。

「そんなあからさまな反応されちゃ、君が虚姫さんを襲った犯人って確定しちゃうよ？ 良いのかいフォローはしなくても？ 取り繕う言葉は？ 前言の撤回は？ どうしたんだい二束“君”。何か言うことがあるんじゃない……」

瞬間、バチツと電流の走る音が響き渡る。

二束の手にはスタンガンが握られており、それを外内の下腹部に押し付けている。

はずだった。

「ん？ 何か僕にしたのかな？」

外内は笑っていた。いくら能力者とはいえ体は普通の学生のそれである以上、体に強い電流が流れれば最低でも気絶はするはずだ。

だがそれは、あくまで流れればの話。

今、外内の体に電流は流れていない。それどころか、二束の手に握られていたはずのスタンガンが無くなっていった。

「な……ん……ん……？」

二束が目の前の現実が信じられないというような表情を浮かべるなか、外内は現実すら見ていないようなポーツとした表情を浮かべている。

「ん？ おや、僕の手にはスタンガンが握られているなあ。これはまるで、神様が僕に犯人を攻撃しろといっているようだね」

思考停止していた二束が慌てて外内の腕を見ると、そこについて先ほどまで自分が手にしていたスタンガンが握られていた。

「まさか……。君は空間移動能力者なのか!？」

「そーゆーことだよ先輩。正確には立入禁止キープアウトだけどね。ま、詳しく説明する気なんてないけどさ」

「……………つちいいいいいつつ!！」

それまで銅像のごとく動かなかった二束が、突如図書室のドアに向かって走り出す。しかし、外内はそれを追うようなことはせずに一言、

「新縫君、そいつ何とかして捕まえて」

気楽そうにそう言い放つだけであった。

一方、二束は第二の敵の存在に嫌な汗をかいていた。

「新縫？ くそ、もう一人仲間がいるっていうのかよ!！」

その直後、二束の体全体が一瞬輝く。そしてその次の瞬間には、二束は二束ではなく『外内 出入』へと変身していた。そしてその『外内』の姿のまま二束は図書室の外へと出て行った

o t h e r p l a c e N o . 1

「へえ。なかなか面白くなってきたじゃないかい」

黒い部屋の住人は興味深そうに相槌を打った。しかしそれはあくまで『そうに』であって、決して本当に興味があるとは思えなかった。

そこはとても黒い部屋だった。

深く暗く今が昼なのか夜なのか、自分が今どこにいるのか、生きているのか死んでいるのか。そんな何もかもが分からなくなりそうになるくらいに、その部屋は黒かった。

その黒い部屋に一人の男と一人の女がいた。

一人はこの学校の校長でもあり、また科学者でもある男だ。ゆったりとした高級そうな椅子に腰を下ろしながら話を聞いていた

もう一人はまだ幼い少女であった。制服を見るに、どうやらこの学校の生徒の一人のようだ。少女は校長の前に長い机を挟んで立っており、手には何枚もの資料が握られていた。その資料には幾つもの文字、それに少しながら絵が描かれていた。

それはまるで一冊の本の様でもあった。

そう考えるならば、少女はそれを子供に寝かしつけるように読んで

いるようにも見える。

しかし実際はそうではなく、それは本当に単なる資料に過ぎない。ただ、少女がそれをあたかも物語のように読んでいただけのことだった。

「で、次は逃走する二束くんを追いかけられる新縫くんと外内くんの、ハラハラドキドキな展開が繰り広げられる訳だね？」

「そんな面白い事は起きないよ、何にも。あたしはただ、起きた事を先生に出来るだけ正確に、ある程度テキストに話すだけさ」

少女はシニカルに笑うと、スカートのポケットからガムを一枚取り出し口に挟んだ。挟みはするが、それを噛むことはなくそのままタバコのように口にくわえ続けている。

「まだ話は続けた方が良い？ あたしちよつと喉渴いたんだけど…」

「ああ、引き続きお願いされてくれないかな。その後どんな風に君の“思い通り”に事が運んだのか、少なからず気になるんだよ」

校長は目の前の少女を気にすることなく、机に置かれている冷たい緑茶を啜った。自分に羨ましそうな目が向けられているという事には、まるで気づいていないようだ。

「思い通り、ねえ……。そもそも先生が変な事をやり始めるから、あたしがその後処理をしなくちゃいけなくなっただよ？ そこに何か負い目とかは感じないの？ それに、人が喉渴いてるって言うのに全然気にせずゴクゴクお茶飲み出すしさあ」

「変な事とは失礼だね。私にとってはとても重要な実験だよ。だからこそ結果が“あんなモノ”だったことにも相当なショックを受けたよ。……………ま、ジャンク送りだろうね。あの子は」

そう言い終わるとまた再びグラスを持ち、ゴクゴクと緑茶を飲み干した。本人にはなんの悪意も無いのだろうが、それが逆に少女をイラつかせた。しかしこんなことには慣れてるので、そこまで目くじらを立てる必要も無いのかもしれないが。

「最初からあたしは言ってたじゃない、さつさとジャンクに送りつけとけて。それを先生は『まだ可能性は残っている』とか意地張っちゃってさ」

「私はそんな意地っ張りな性格では無いんだがな。まあいい。そういえば五入くんとは最近連絡取れるかい？ 私がいくら電話をしても一貫して無視され続けてて、先生悲しいんだよ……………」

演技染みだその言動には既に慣れてるのであるう、少女は大した反応も突っ込みもいれずに静かに質問に答えた。

「五入って、四捨五入のことか？ あいつはいつも単独行動してるし、正直よく分からないんだよね。最近会ったのって……………1ヶ月ぐらい前だと思っけど」

「ふむ。まあ再三ちゃん辺りにも聞いておくでしょうかな、うん。じゃあお話の続きをドウゾ」

「はあ……………。はいはい」

少女は軽く溜め息をついてから、ようやく口にくわえていたガムを噛み始めた。それは単に食べたくなったからそうしたのかもしれないし、或いは何か物を噛んで唾液を飲まなければやっていけない程に喉が渴いていたのかもしれない。

どちらにしろ校長はそんなことは気にも留めず、机に並べられている少女が持っているものとは別の資料を眺めていた。

校内序列第七位 話さない語り部こと 七転しちてん 八倒はたお

校内序列第六位 保留

校内序列第五位 治さない名医こと 五臓いつぞう 六腑むふ

校内序列第四位 片付けない清掃員こと 四捨よすて 五入ごいり

校内序列第三位 導かない案内人こと 再三ふたたび 再四さいし

校内序列第二位 裏切らない詐欺師こと 二束ふたたば 三文みふみ

校内序列第一位 裁かない裁判官こと 一石ひといし 二鳥ふどり

彼らこそがこの学校を。否、彼らこそがこの学校のトップである校長を最も“楽しませる”ことが出来る生徒たちである。

「楽しみじゃないか。君たちが一体どれほど活躍してくれるのかさ」

校長は静かに少女の話聞きながら笑っていた。もうその話は耳に届いてはいないであろう。あの自分勝手な校長の事だ。今の彼の頭の中は、きつと近い未来に起こるであろう一つの現象で埋まっているだろう。

「さて、皆には私のちょっとしたゲームに付き合っただけとしよう。小規模にして大災厄の、最高にして最低の、圧倒的にして絶対的の下らない大戦争にね」

学園都市の真実 【前】（前書き）

申し訳ありませんが、今回からは新縫の一人称視点ではなくな
ります（俺 新縫）非常に読みづらくしてしまいすみません。

学園都市の真実 【前】

新縫が廊下でぼんやりと天井を眺めていると、突然図書室の中が慌しくなった。

「新縫君、そいつ何とかして捕まえて」

外内の声が聞こえた。新縫は慌ててドアへと近づき二束を捕まえようと身構えるが、そこに飛び出してきたのは外内だった。

「外内！？ 二束はどうし……」

しかし外内は新縫のことは完全に無視し、廊下を走り去っていった。そこでようやく新縫は気づいた。あれが偽者の外内、つまり二束だったということに。

「はあ……、やれやれ。しっかり見張っておいてよね新縫君」

偽者の外内に続いて本物の方の外内が、面倒くさそうな表情をしながら部屋から出てきた。

「あいつの能力を忘れてた……すまない。それより、早く二束の奴を追いかけるぞ」

「待った」

走り出そうとした新縫を制するよう外内が言い、

「15分後にまたここに戻ってこよう。そうしないと、誰が本物で誰が偽者か分からなくなる」

「そうか、あいつは今みたいに变身出来る訳だし……。分かった、15分後だな」

外内にしつかりと確認をとった後、新縫は二束が辿っていった道を追いかけていく。当然、方向音痴な新縫がこの学校の道を知り尽くしている二束を見つけることが出来るかどうかは分からないが、ここで突っ立っている訳にもいかない。

(くそ……!! 今度こそ絶対捕まえて、虚姫を助ける方法を聞き出してやる!!)

それでも新縫はただ闇雲に廊下を駆け抜けていった。

・
・
・

一人取り残された外内はしばらくその場に留まっていたが、15分間ここに居続けるのも暇なので形だけでも二束を探す事にした。

外内は、あくまで図書室の近くの範囲を探す事に徹し、その場を離れすぎないように気をつけながら二束を探していた。とは言えそれほど近くに二束が隠れているはずもなく、結局は無駄な15分を過ごすことになったのだが。

「さて。そろそろ戻ろうかな」

教室内の時計で時間を確認した外内は今まで同様に走る事はせず、静かに廊下を歩きはじめた。他の生徒はもう完全に下校しており、どの教室も静けさに満ちていた。

そんな誰もいない静かな空間を眺めながら外内は図書室へと向かった。

窓から図書室の中を覗いてみると、意外な事に新縫は既に戻ってきていた。相当急いで走っていたらしく、制服の袖を肘のあたりまで捲くり汗をぬぐいながら、肩を上下に動かし荒い呼吸を繰り返している。

「はあ、はあ……。ああ外内、ちよつと遅かったな」

「……いや、君が予想に反して早く来過ぎているだけだよ」

開けっ放しのドアをくぐり外内は図書室の中へと入る。

「そつえば新縫君、一つ質問があるんだけど」

「ん？ なんだ？」

「確認なんだけど、一応僕たちの寮の部屋の番号を言ってくれないかい？ 君が本物なら当然覚えているだろう？」

外内は新縫の表情を窺うような素振りも見せず、棚に置かれている本を適当に物色しながら訊ねる。

その質問に新縫は、何だそんな事かと言いながら答える。

「それは『187』号室だろ。これでいいか？」

「……うん、ありがとう。安心したよ」

君はどうかやら本物のようだ、と外内は言った。

そう、本物の。

「君は本物の、“二束 三文”みたいだね」

そう言い放った瞬間、外内は今までのゆっくりとした動きからは想像できない速さで新縫の背後へと近づく。体力が消耗している上、不意を突かれた新縫は気づくのが遅れてしまった。

無抵抗の新縫の膝裏に外内は軽い回し蹴りを浴びせる。ガクツと折れ曲がった体に、流れるようにもう一方の脚で背中に膝蹴りを食らわせる。

「グツ……カ……！！」

予想外の襲撃に新縫はなす術もなくやられてしまう。そしてそのまま地面へと倒れこんでしまった。

「んー。やっぱり君、偽者みたいだね。本物の新縫君はこんなに簡単にへこたれないし」

うつ伏せに倒れる新縫の正面に立ち、外内は告げる。

「な、何言ってるんだよ外内！ 俺は本物だ！ 現にこの待ち合わせ場所に来たじゃないか」

「むしろ来たからこそ、偽者だとも言えるんだけどね。僕はあの『15分後に戻ってこよう』というセリフをわざと君に聞こえるように言ったんだよ」

そこで一度言葉を区切り、手にしていた本を机に置いた。

「それを聞いた君は新縫君に成りすまして、本物の新縫君よりも先にこの図書室に急いでやって来た。だから君はそんなに息切れしていたんだね。うん、なるほど」

うつ伏せになりながら驚く新縫に向かって外内は宣告する。告白するようには、白状するようには、状況を伝えるようには。

「で、まあ他の要素を挙げるなら

「まず僕より先にこの図書室に来た事。あの方向音痴の新縫君が、図書室の近くを周っていた僕より先に図書室に戻ってくるなんて、珍しいなんてレベルではなくあり得ない。」

「そして同様に部屋の番号も覚えていると言つのもちよつと怪しい。ま、これはあくまで確認程度のもので、君が寮監という部屋の番号をよく知る立場だというを利用させてもらっただけなんだけど。」

「で、最大の理由が君の腕。非常に残念な事に本物の新縫君の左腕には、現在“包帯が巻かれている”んだよ、昨日の怪我でね。それに対し君のその腕はとても綺麗な状態じゃないか。おかしいよね？
うつ伏せに倒れている新縫は咄嗟に自分の左腕を見る。そこには外内の言ったとおり包帯は巻いておらず、いかにも健康そうな腕があった。

「つまり君は完全に偽者の新縫君、本物の二束君。惜しかったね、せつかく腕章の色は赤にしていたのにさ」

ひどく良いテンポで、外内は答えあわせをしていくかのように言った。どうやら間違いは一つも無かったようだが。

新縫 いや、二束は何も言わない。何も言わぬまま床に顔を押し付けているせいで表情はよめない。

そして二束はゆっくりとその顔を上げる。まだ外観は新縫のままだが、実際には二束ということは既に明白だ。さつさと元に戻したらどうだい、と外内が軽く毒づいてやるうかと考えていたとき。

突然外内の下腹部に異変が起きた。

小さな違和感だったがふと制服の内側の腹を見ると、そこが徐々に血で赤く染まっていくのが見えた。

「どっいつ……」

外内が驚いたのは自分が怪我を負っている事に対してではない。そこに『傷』というものが存在できていた事にだ。

外内の立入禁止には二つの能力がある。

自分が触れたものを転移させる能力と、自分に触れたものを強制的に転移させる能力。

前者は自分の意思で発動するが、後者は周囲に注意をしながら脳内で演算を行い続けられれば自動で発動する。もちろん相当の演算能力とスピードがなければ成し得ない芸当だ。その演算能力がある故に、彼の能力は空間移動ではなく立入禁止なのだ。

当然今はその立入禁止を発動していた。つまり、自分に触れた物体は弾丸だろうと何だろうと体を貫通することなく、別の場所に移動するはずだ。しかし、それをしなかったと言う事は。

（僕が“触れられている”と認識出来ないもの、ということか……）

例えば空気。そこに存在はしていても触れていると自分が認識出来ない限り、能力は発動しない。それと同様に水、火、光などもそうだ。

「水……。なるほど、まさか君が敵だとは思わなかったよ。最初からこうなるように仕向けていたのかい？ だとしたら大した演技力じゃないか」

腹部を押さえながら外内は図書室のドアへと顔を向ける。そこには小さな女子中学生が一人、場にそぐわない水鉄砲を両手で握り締めながら、泣き出しそんな顔でこちらをじっと見ていた。

果たしてそこには、若石優が立っていた。

若石の出現と共に、それまで無言だった二束が突如として叫びだす。

「そうだ若石、そいつが“偽者の外内”だ！ はやくそいつを打つんだ！！」

「何だつて？ あー、二束君。君、若石さんに面倒な入れ知恵をしてくれたみたいだね。本当に厄介な……」

外内は自分の背後に横たわっている二束に、そう吐き捨てるように言った。

そこに若石がいることに外内はそこまでの疑問を感じなかった。何故なら、新縫と外内が喫茶店を出たとき、彼女が自分たちの後を追ってきた事に外内は気づいていたからである。あれほど新縫を事件に巻き込む事を拒んでいた若石が、そう簡単に新縫を見放すはずが無い。しかし、校内に入ってから若石に気を置くことを忘れていた。

おそらくその間にこのややこしい校舎に迷い込み、新縫に変身した二束と出会ったのだらう。そしてそれを『本物の新縫』だと信じ込んでしまったというわけだ。

結果、根も葉も無い荒唐無稽な情報を吹き込まれてしまった。その一つが『二束という肉メタモルフォーゼ体変化の能力者が外内に変身している』ということなのだろう。もしかすれば、その他にも何か面倒な情報を流された可能性もある。

「若石さん、君がその新縫君もどきに何を言われたのか。大方の見当はついてるけど、出来れば一旦僕を攻撃するのを止めてくれな
いかな？ 話し合おうじゃないか」

「そんな事はどうだっていいです！ はやく……。はやく虚姫さんを助ける方法を教えてください！！」

聞く耳を持たないといった様子でさらにもう一発、若石は外内の足に向かって水を打つ。既に一度腹を打たれている外内は避ける事もできず、その水の弾丸の軌道を見ている事しかできなかった。

ブシュ、という生々しい音が鳴り響く。外内は足を打たれたことによりバランスを崩し、倒れそうになるのをかるうじて机に寄りかかる事で防いだ。

「若石さん、落ち着いて話を聞いてくれ。そこにいる新縫君は偽者だ。君は……騙されている」

「嘘です。それじゃ本物の新縫さんはどこにいるって言うんですか？」

外内は腹から滴したたる血を抑えながらその質問に答えようとする。が、二束がそれを遮った。

「そいつの話を聞くのはやめろ、若石。相手の口車に乗せられるだ

けだ！」

「乗せているのは君のほうじゃない……、つか！」

外内は寄りかかっていた長い机を、うつ伏せに倒れている二束の上に転移させる。

大量の出血と若石が突然この場に現れた事により、外内は若干以上に混乱していた。よって最高のコンディションの半分以下の力しか発揮できず、触れている物体を移動させるのにも数秒の時間を要してしまった。

「何!？」

二束はすぐに立ち上がりその場を離れようとしたが、足が上手く動かない。先ほどの外内の一撃で足の感覚が麻痺しているようだった。動く事のできない二束は頭上から襲い掛かる机に対し、頭を覆う事しかできなかった。

しかし外内の演算にミスが生じていたらしく、机は二束に直撃する事はなく下半身を押しつぶすように落下した。

「あ、新縫さん！」

若石が叫ぶ。今の彼女にとって外内は、虚姫を自分から奪い去り、それを助けようとしてくれた新縫さえも殺そうとする悪党にしか見えないうつ。

その悪党を倒すことよりも、若石は新縫を助け出す事を優先した。

二束 若石にとっては新縫 に覆いかぶさるように机は逆さま

に倒れているが、若石一人でそれをどかすのは無理であろう。

「う……。新縫さん！！　しっかりして下さい、新縫さん！」

それでも必死に若石は二束を助け出そうとする。それが本物の新縫だと信じて。

（新縫君がさつさと来てくれたら、すぐに誤解が解けるんだけどね……。そうすれば変身しているのが僕ではなく、どちらかの新縫君ということに若石さんも気づくはずだし、そうすればこれまで嘘をついていた目の前にいる方の新縫君が偽者だと証明できる）

外内はそう考えた。しかし、あの方向音痴がいつ来るかなんて分からない。かといって外内本人がこの場を離れれば、自分が犯人だと言っているようなものだし、何より二束と若石を二人きりにすれば更に厄介な事を言われかねない。

（さて、どうすれば良いんだ。現状？）

外内が床にぺたりと座り込み思考を張り巡らせようとした。そのとき、

シュン、という音とともに小さな何かが図書室の中に飛び込んだ。

それは外内にも若石にも、そして二束にも当たりはせずそのまま本棚に向かって激突した。まるで細い弾丸が壁を穿つように、その小さな何かは本棚に穴をあけた。

よくみるとそれは一本の螺子ねじだった。通常のサイズよりも少し大き

めで人差し指ほどの長さのものだ。

「おい、新縫くんよお。お前が本物の新縫だと言い張るんだったら、今みたいにその螺子を飛ばしてみろよ」

その声はドアの向こうから聞こえた。外内と若石の二人は思わずそちらに顔を向ける。

「出来るのか？ 何も無い空間に磁場を発生させる事を。鉄に磁界を形成させる事を。そしてそれらの磁力同士を反発させて、今みたいに螺子を高速で飛ばすことが出来るのかよ！？」

電撃使い（エロクトロマスター）の中には磁力を扱う能力者も含まれている。それは、磁力と電気には双方に密接な関係があるためだ。その中でも特に磁力を扱う事に特化した能力は磁力操作マグネキネシスと呼ばれる。文字通り磁力を操るその能力は、何も無い空間に磁場を形成したり、物体に磁界を生み出し磁石のような状態する事ができる。

それらの能力を組み合わせることで、空間に発生させた磁極と物体に発生させた同じ磁極　簡単に言えばS極とS極　を反発させる事により、物体を高速で打ち出す事ができる。

「はあ……。随分遅かったね。別にヒーローは遅れて登場する必要はないんだよ？」

外内は呆れたように、しかしどこか少し安心したような声でその声の主に話しかけた。顔は見えないがその声と能力を見るだけで、そこに誰がいるのかは明白だ。

「それぐらい分かってるけどな、仕方ないだろ。こればかりは」

外内の呼びかけに応じるように、ドマの向こうの廊下から声が聞こえた。

マグネキネシス
磁力操作の能力者、新縫真希は恐ろしいほどの遅刻と共に図書室に現れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5960/>

とある科学の螺子発射《ボルトシューター》

2010年10月14日12時08分発行